

# 上垣内遺跡Ⅲ

—都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査—

令和2年3月

大阪府教育委員会



# 上垣内遺跡Ⅲ

—都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



卷頭図版 第三調査区遠景（北西から）





## 序 文

北河内地域に属する寝屋川市は、東に生駒山系を望み、西には淀川が南流し、起伏に富んだ自然景観を有しています。こうした環境の多様さとも相まって、市域には国史跡である石宝殿古墳、高宮廐寺跡、府史跡である寝屋古墳、市史跡である太秦高塚古墳に代表されるように、古墳時代から古代を中心として、重要かつ個性豊かな遺跡が多く存在します。またこれらと合致するように、渡来氏族である秦氏の伝承が色濃く残されている地でもあります。

こうした当地における遺跡の様相に関する理解は、近年実施された第二京阪道路建設に伴う発掘調査により、さらに深まりました。代表的な知見として、小路遺跡における祭祀遺物、高宮遺跡における古墳時代集落及び古代の大型掘立柱建物群、太秦遺跡における方墳群の検出などを挙げることができます。

今回の調査の要因となった都市計画道路梅が丘高柳線は、こうした知見をもたらした第二京阪道路に接続することを目的として計画されたものです。平成25年に実施された試掘調査にはじまり、本府教育委員会では梅が丘高柳線の建設に伴ってこれまでに2回の本格調査を上垣内遺跡で実施しています。これらの調査では古墳時代後期の住居跡などを検出しており、その成果は平成27年刊行の『上垣内遺跡』、平成29年刊行の『上垣内遺跡 II』という2冊の報告書として公開しています。上垣内遺跡における3度目の本格調査となった今次の発掘調査では、古墳の周溝である可能性のある溝のほか、中世の井戸や堀状遺構を検出しました。これらは当遺跡においてはじめての発見であり、地域の歴史を明らかにするうえで貴重な成果ということができるでしょう。梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査は継続して行われる予定であり、これからも重要な成果が得られることが期待されます。

発掘調査の実施にあたっては、地元の方々に多大なるご理解とご協力を賜りました。篤くお礼申し上げます。また本府都市整備部からは、計画段階からさまざまな配慮を得ました。

本府教育委員会では、文化財の調査や保護、活用などの事業をこれからも進めて参ります。今後ともいっそうのご支援をお願い申し上げます。

令和2年3月

大阪府教育庁文化財保護課長  
大野 広



## 例　言

1. 本書は、都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴って大阪府教育庁文化財保護課が実施した、大阪府寝屋川市高倉二丁目所在の上垣内遺跡に関する発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は本府都市整備部の依頼を受け、平成31年1月に着手して同年3月に現地調査を終了した。調査対象は合計960m<sup>2</sup>である。調査及び本書作成に係る経費は都市整備部が負担した。
3. 調査は当課調査事業グループが担当し、課長補佐　山上 弘、主査(事業調整総括)井西貴子の指導のもと、副主査　市川 削が現地調査にあたった(職名は平成30年度当時)。調査番号は18041である。
4. 現地測量に係る基準点設置および写真測量業務は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
5. 出土遺物の整理作業は令和元年度に実施した。整理作業は教育庁文化財調査事務所において行い、調査事業グループ主査　藤田道子および調査管理グループ専門員　阪田育功が担当した。
6. 今回の調査で出土し、本書図版に掲載した遺物写真の撮影は、イトーフォトに委託した。また平成26年度に実施した確認調査で出土した遺物の一部について、今回の調査で検出したものと確實に同一の遺構から出土した資料(図13-12～14)が含まれた。そのため、有限会社阿南写真工房に委託して撮影し(大阪府教育委員会2015)に掲載したこれらの写真を、本書に再掲した。
7. 本書の執筆は、第2章第1節を調査事業グループ技師　奈良拓弥が担当したほかは市川が執筆し、編集した。
8. 本報告書は300部を作製した。

## 凡 例

1. 本書掲載の測量図及び平面図は測量法に基づく「作業規程の準則」に準じる。世界測地系の直角座標により位置と方位を示し、方位針は座標北を示す。なお今回の調査地においては、真北は座標北に対して0度12分東に振れる。高さは東京湾平均海面を基準とする標高(T.P.)で記し、本文および挿図中では TP +○m と表記する。
2. 遺構番号は第1・第2・第3の各調査区ごとに、それぞれ101、201、301から順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。なお、掲載した遺物及び写真は本書の番号で管理し、文化財調査事務所において保管している。
3. 土層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄／2002年度版)に拠る。
4. 遺物実測図の断面は、須恵器・陶器・磁器を黒塗り、瓦器・瓦質土器を網伏せとし、その他を白抜きとした。
5. 註および引用・参考文献は巻末に一括した。
6. 各時代の遺物に関する理解は、原則として以下の文献に拠った。遺物の記述に際し型式名などを用いる場合があるが、煩雑さを避けるため、これらの引用文献の記載を省略した。
  - ・古墳時代の須恵器： 大阪府立近つ飛鳥博物館2004
  - ・円筒埴輪： 川西1978
  - ・瓦器： 尾上・森島・近江1995
  - ・瓦質土器： 績2007・2010
  - ・肥前磁器： 九州近世陶磁学会2000

# 上 垣 内 遺 跡 III

- 都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査 -

巻頭図版

序文・例言・凡例

目次

第1章 調査経過と調査方法	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第1項 調査にいたる経緯	1
第2項 調査の経過	2
第2節 調査と整理作業の方法	3
第2章 地理的・歴史的環境と既往の調査成果	5
第1節 地理的・歴史的環境	5
第2節 既往の調査成果	9
第3章 調査の成果	11
第1節 調査地の層序	11
第2節 各調査区の遺構と遺物	14
第1項 古墳時代の遺構と遺物	14
第2項 中世の遺構と遺物	19
第3項 近世の遺構と遺物	29
第4項 包含層出土資料および遊離資料	32
第3節 確認調査の結果	34
第4章 総括	37
引用文献	38

抄録

## 挿図目次

図1 上垣内遺跡の位置	1	図16 堀状遺構 105ほか遺構実測図	21
図2 発掘調査のようす	2	図17 堀状遺構 105出土遺物実測図	23
図3 地元向け現地公開のようす	2	図18 井戸 208 遺構実測図	24
図4 上垣内遺跡の位置と今回の調査区の呼称	4	図19 井戸 208 出土遺物実測図	25
図5 上垣内遺跡と周辺の地形	6	図20 土坑 117 遺構実測図	26
図6 上垣内遺跡と周辺の遺跡	8	図21 落込み 301・302 遺構実測図	27
図7 既往の調査地点	9	図22 落込み 302 出土遺物実測図	28
図8 既往の調査における検出遺構	10	図23 近世の遺構	29
図9 地層と遺構の関係図	11	図24 窯 107・土坑 108 遺構実測図	30
図10 調査区地層断面	13	図25 埋甕 122・141 遺構・遺物実測図	31
図11 古墳時代の遺構	15	図26 近世包含層出土遺物実測図	32
図12 溝 313・325 遺構実測図	16	図27 捣乱出土遺物及び遺離資料実測図	33
図13 溝 313・325 出土遺物実測図	18	図28 確認調査の位置	34
図14 溝 313 出土遺物実測図	19	図29 確認調査各トレンチ実測図	35
図15 中世の遺構	20		

## 付表目次

表1 上垣内遺跡における既往の調査歴	10
--------------------	----

## 原色図版目次

原色図版1 調査区全景	原色図版4 中・近世の遺構
原色図版2 各調査区の地層	原色図版5 古墳時代の遺物
原色図版3 古墳時代の遺構	原色図版6 中・近世の遺構

## 図版目次

図版1 第1調査区全景	図版9 第3調査区の遺構(1)
図版2 第1調査区の地層	図版10 第3調査区の遺構(2)
図版3 第1調査区の遺構(1)	図版11 第1調査区出土遺物
図版4 第1調査区の遺構(2)	図版12 第2調査区出土遺物
図版5 第1調査区の遺構(3)	図版13 第3調査区出土遺物(1)
図版6 第1調査区の遺構(4)	図版14 第3調査区出土遺物(2)
図版7 第2調査区の遺構	図版15 第3調査区出土遺物(3)
図版8 第3調査区の全景と遺構	図版16 第3調査区出土遺物(4)

# 第1章 調査経過と調査方法

## 第1節 調査の経緯と経過

### 第1項 調査にいたる経緯

府が実施する公共工事については、計画策定の段階から文化財の有無や取扱いについて関係部局と調整する機会を設けており、中・長期的な計画の中に発掘調査等の期間も含まれている。発掘調査が必要な場合、道路建設の場合には、長い距離にわたって、かつ長期間での調査が必要となるため、調査は細密な全体スケジュールの中に組み込まれる必要がある。

今回の発掘調査の要因となった梅が丘高柳線についても、確認・試掘調査を経て調査の計画が立てられた。以下にその経緯を記す。

**平成25年度** 梅が丘高柳線は、西側から道路建設が進められている。当該道路の第二京阪道路から都市計画道路打上線までの区間のうち東半が上塙内遺跡の範囲に該当することから、遺跡内については確認調査を、遺跡の隣接地については試掘調査を実施した（調査番号：13040）。確認・試掘調査は12か所で実施したが、顕著な遺構・遺物は検出されなかった（大阪府教育委員会2014）。

**平成26年度** 平成25年度に実施した確認・試掘調査では、本調査の要否について明確に判断できない部分があった。そのため一部を再度試掘調査した結果、顕著な遺構等が検出されたため、当該地を含め



図1 上塙内遺跡の位置  
(国土地理院作成の基盤地図情報を用いて作図)

て上垣内遺跡の範囲拡大の手続きをとった上で、発掘調査を実施した(調査番号：14009)。

また、現在の東高野街道より東側の道路予定地内(上垣内遺跡)の状況について把握するため、18箇所のトレーナーを設定し、確認調査を実施した。その結果、粗密はあるものの調査箇所の全体について、埋蔵文化財の包蔵が確認された。

平成27年度 平成26年度の発掘調査知見により、調査範囲の東西にも遺構が拡がることが予想されたため、発掘調査を実施した(調査番号：15001)。

平成30年度 道路建設の進捗に伴って、平成26年度の確認調査により本調査が必要と判断された範囲のうち、現在の高野街道に接する部分について発掘調査を実施した(調査番号：18041)。また、平成26年度の確認調査範囲のうち、本調査の要否について明確に判断できない部分について、追加のトレーナーを設定し、確認調査を実施した。本書は、これらの本調査および確認調査の結果について報告するものである。

## 第2項 調査の経過

発掘調査は平成31年1月に着手した。調査区設定並びに地区設定については、本章第2節に後述する(図4)。調査の手順は、第3章第1節に後述する現代盛土および第1層および第2層の一部を重機で掘削し、それ以下の地層および遺構については適宜、写真撮影や平面図・断面図の実測などを実施しながら、人力で掘り下げた。

その途中で、1月29日および3月19日には空中写真測量を実施した。空中写真測量は、調査ヤードが狭くクレーンによる撮影が行えないことから、小型の無人航空機(ドローン)を使用して実施した。

また、平成31年3月20日には地元自治会の協力を得て、調査地近隣の住民を対象とした現地の公開を実施し、63名の参加を得た(図3)。

本調査の終了後には確認調査を実施し、3月31日には現地における作業を終了した。



図2 発掘調査のようす



図3 地元向け現地公開のようす

## 第2節 調査と整理作業の方法

### 地区設定

本遺跡が所在する寝屋川市高倉は世界測地系(JDG2000)の平面直角座標系第VI系 X=-138,400～-138,500、Y=-32,300～Y=32,200の範囲に位置する。調査にあたり、調査区内に存在する段差や道路などを境界として、西から東に向かって第1～3調査区を設定した。第1調査区と第2調査区は調査開始前に存在した道路によって、第2調査区と第3調査区は石垣および擁壁によって区切られる。調査は南東側に建つ民家への通路の切り替え工事などの関係から、調査区第1→3→2の順で実施した。遺物取り上げや遺構図面作成のための最小単位となる地区設定には平面直角座標系ではなく局地座標系を使用し、局地座標系に基づいて10mごとの区画を設定した。それぞれの区画は、「SE」など方位に基づく名前を付し、遺物の取り上げなどはこの区画に基づいて行った(図4)。

### 遺構番号

検出した遺構には、遺構の種類に関係なく、調査区ごとに3桁の通し番号を付している。遺構番号は、第1調査区は100番台、第2調査区は200番台、第3調査区は300番台とした。

掘削　掘削に際しては、整地土をバックホウで掘削し、その下層については1層ずつ人力で掘削したうえで、精査、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構掘削に際しては、半裁または地層観察用の歓を残すことによって地層断面の観察、写真撮影、断面図の作成を行った。地層は第3章第1節に述べる層準に基づいて掘削し、極地座標に基づいて設定した区画ごとに遺物の取上げを行った。

### 記録

検出した遺構面の実測のうち遺構全体図については、第1調査区については50分の1、第2・3調査区については20分の1の縮尺で写真測量を実施した。個々の遺構、遺物出土状況等の実測については、調査区周辺に配した4級基準点をもとに、必要に応じ20分の1、10分の1等の縮尺で個別に実測図を作成した。また、調査区および各遺構の断面図は原則として20分の1の縮尺で作成し、東京湾平均海水面(T.P.)を基準とした。

遺構の撮影には、6×7cm判およびデジタル一眼レフカメラを用い、6×7cm判は白黒フィルムで撮影した。6×7cm判は遺構検出面の全景や重要な遺構の撮影の際に使用した。

### 整理作業

現場で作成した図面類については、適宜台帳等を作成して整理し、報告書に掲載するものについてはトレースを行った。出土遺物については、洗浄、マーキング、接合、復元等の作業を適宜実施し、必要なものについては報告書に掲載するため実測図を作成した。遺構図、遺物実測図等のトレースは、すべてAdobe社のIllustratorCS4を使用して行った。報告書の編集作業には、Adobe社のInDesignCS4を使用した。なお、出土遺物のうちとくに重要と認められるものについては、報告書掲載用に委託作業にて撮影を行った。

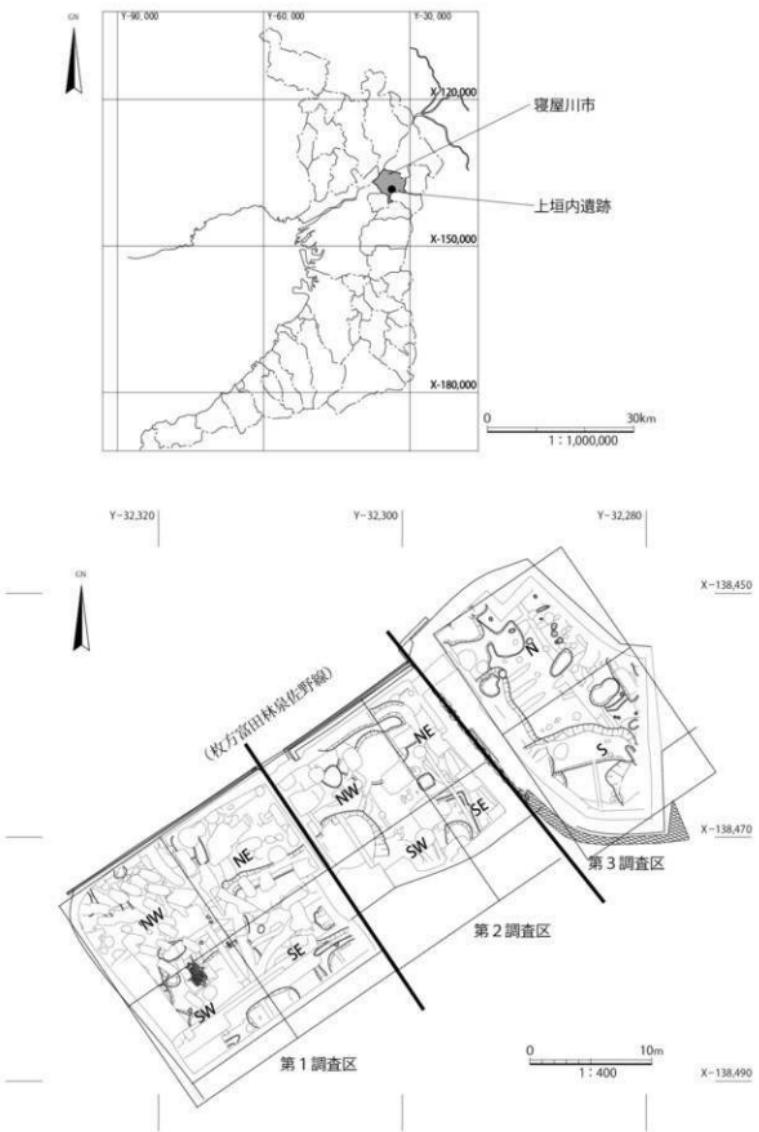


図4 上垣内遺跡の位置と今回の調査区の呼称

## 第2章 地理的・歴史的環境と既往の調査成果

### 第1節 地理的・歴史的環境

#### 地理的環境

上垣内遺跡は枚方丘陵の南西端に位置し、大阪層群、中位段丘及び高位段丘の上に立地する。立地する丘陵は寝屋川と讚良川によって区画され、讚良川は現在の寝屋川市と四條畷市の市境となっている。遺跡周辺は、谷が複雑に枝状に入った凹凸の激しい地形で谷筋には溜池が構築されておりこの地の景観を作っていた。しかし、現在は宅地開発によって丘陵は削られ、池も埋め立てられており景観は一変し住宅街へと変貌している。

次に当遺跡周辺の歴史的環境について時代順に概観する。

#### 旧石器時代

当時代の住居などの遺構は見つかっていないが、高宮遺跡・讚良川遺跡で国府型ナイフ形石器が出土しており、太秦遺跡において古墳の盛土からではあるがナイフ形石器が出土している。いずれも丘陵上に位置する遺跡であり、丘陵上で生活していた様子が伺える。

#### 縄文時代

縄文時代の遺跡としては、四條畷市との境に位置する讚良川遺跡が著名である。中期前半の船元式から里木式の土器が出土しており、遺構として4基の貯蔵穴を検出している。貯蔵穴の1つには底の部分にクリの実が残っており、その役割を終えた後にゴミ穴として再利用されていた。

#### 弥生時代

前期では高宮八丁遺跡で溝や上坑などが検出されている。この遺跡で特徴的なものとして中期の玉作り遺物がある。碧玉や鉄石英の原礫や剥片とともに紅簾片岩製の石鋸が出土しており、集落の中で玉作りが行われていたことが判明した。前期末から中期中葉まで集落は繁栄していたが、それ以降になると規模が縮小し秦遺跡が隆盛する。

高宮八丁遺跡の東の丘陵に立地する太秦遺跡は、中期から後期にかけて営まれた大規模な高地性集落である。中期後半の大尾遺跡では30基以上の方形周溝墓が検出されており太秦遺跡の墓域と考えられる。

後期は寝屋南遺跡において9棟の竪穴住居跡と掘立柱建物2棟が検出され、小路遺跡においても新たな集落が営まれている。

#### 古墳時代

高宮遺跡で前期から中期にかけての遺構及び遺物が検出されている。前期には丘陵の斜面から裾部において方形周溝墓が造営され、中期になると丘陵を造成して竪穴建物群が構築される。竪穴建物の大半は平面形態が方形を呈し作り付けの竈を有し、初期の須恵器や轉式系土器を共伴することから、いわゆる渡来系集団によるものと考えられる。高宮遺跡の周辺は、太秦という地名であり古くから渡来系氏族である秦氏との関連が指摘されていた。同時期にこの渡来系氏族の墓域と考えられる太秦古墳群が築造



図5 上垣内遺跡と周辺の地形(仮製2万分の1地形図「星田村」を利用)

される。古墳群は、直径37mを測る太秦高塚古墳をはじめ中期から後期にかけての小型古墳で構成されている。

横穴式石室を持つ古墳として奥山1号墳・寝屋古墳があり、当遺跡東方の丘陵高所には、古墳時代終末期の横口式石槨を主体とする石宝殿古墳が所在する。

#### 古代

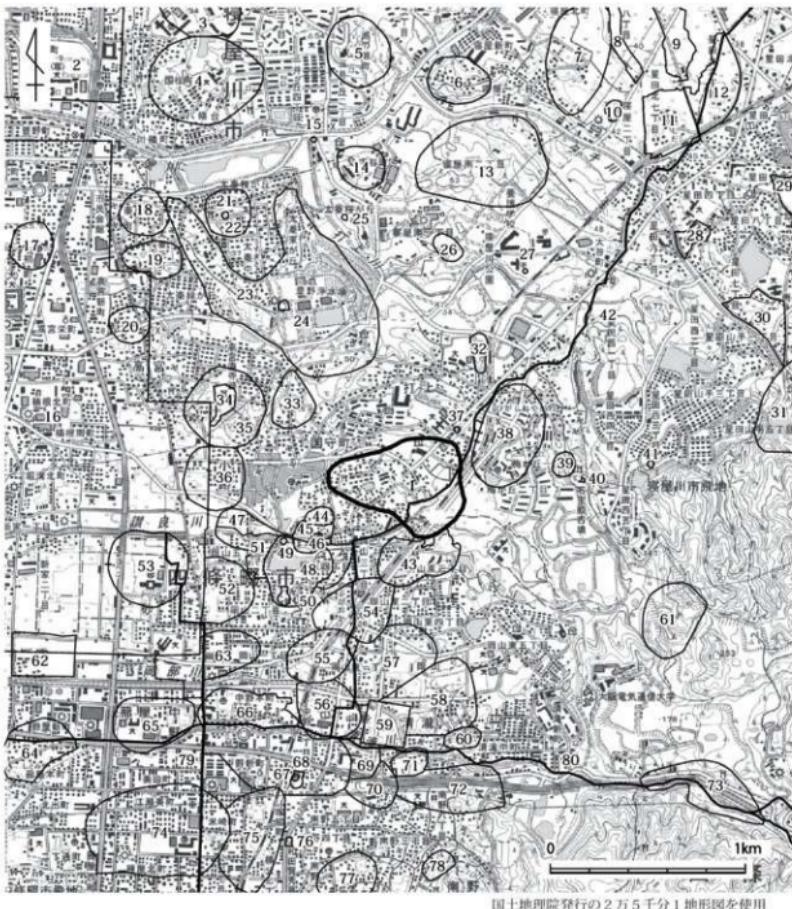
白鳳期に創建された古代寺院として延喜式内社の大杜御祖神社の境内に国史跡高宮廃寺跡が所在する。金堂の前面に東西二塔を持つ双塔式伽藍配置で、西に隣接する高宮遺跡では一辺約1.5mを測る柱穴で構成された大型の総柱建物が5棟検出されている。さらに、大尾遺跡、太秦遺跡においても多くの掘立柱建物が存在する。これらの建物群は、高宮廃寺の伽藍の中軸と方位がおおむね一致しており、寺院に付属した施設や関連した古代氏族の居住域であったと指摘されている。また、丘陵の裾部に所在する小路遺跡では、流路から人面墨書き器など祭祀遺物が多数出土しており、官衙的な性格を示すものと推定される。

他にも打上遺跡では、奈良時代の14棟の掘立柱建物跡が検出され、讃良川沿いにある三味頭遺跡で白鳳時代の瓦が見つかっており讃良寺跡があったと推測されている。

#### 中世

高宮遺跡では平安時代に引き続き鎌倉時代にも集落が造営される。丘陵の裾部に掘立柱建物を造り、丘陵をおりた低地を耕地として生活し、丘陵の上部を墓域として利用していた。墓域からは、鳥帽子と鉄刀、土器などが出土した土壙墓が検出されている。この地を拠点とした有力者の屋敷地を中心とした一連の遺構群と評価できる。

東部の丘陵に立地する上垣内遺跡の東部においては集落の一部と考えられる遺構を検出し、大量の中世の遺物が出土している。



国土地理院発行の2万5千分1地形図を使用

- 1.上垣内遺跡 2.茨田条里遺跡 3.三井南遺跡 4.秦山遺跡 5.池の瀬遺跡 6.寝屋遺跡 7.寝屋東遺跡 8.堀之内遺跡 9.平池遺跡
- 10.伝・寝屋長者屋敷跡遺跡 11.星田駅北遺跡 12.四馬塚遺跡 13.寝屋南遺跡 14.太秦北遺跡 15.冠シ塚古墳 16.讃良郡条里遺跡 17.高宮八丁遺跡 18.神宮寺跡 19.太秦元町遺跡 20.法復寺遺跡 21.太秦寺跡 22.鹿埴輪出土地 23.太秦遺跡 24.太秦高塚古墳 25.太秦1号墳 26.奥山遺跡 27.寝屋古墳 28.布懸遺跡 29.新宮山遺跡 30.星の森遺跡 31.星田旭遺跡 32.打上中道遺跡 33.大尾遺跡 34.高宮庵寺跡 35.高宮遺跡 36.小路遺跡 37.打上古墳 38.打上遺跡 39.打上神社古墳群 40.石室殿古墳 41.長谷古墳 42.東高野街道 43.坪井遺跡 44.三味頭遺跡 45.讃良寺跡 46.讃良川川床遺跡 47.讃良川遺跡 48.更良岡山古墳群 49.サラ寺墓地 50.忍岡古墳 51.更良岡山遺跡 52.北口遺跡 53.砂遺跡 54.忍ケ丘駅前遺跡 55.南山下遺跡 56.奈良田遺跡 57.岡山南遺跡 58.清滌古墳群 59.正法寺跡 60.国中神社内遺跡 61.千賀敷遺跡 62.麓屋北遺跡 63.奈良田遺跡 64.麓屋遺跡 65.鎌田遺跡 66.中野遺跡 67.中野共同墓地 68.墓ノ堂古墳 69.四條畷小学校内遺跡 70.木間池北方遺跡 71.大上遺跡 72.城遺跡 73.上清滌遺跡 74.雁屋遺跡 75.南野米崎遺跡 76.伝和田賢秀墓 77.南野遺跡 78.近世墓地 79.河内街道 80.清流遺跡

図6 上垣内遺跡と周辺の遺跡

## 第2節 既往の調査成果

### 平成26年度の調査

平成26年度は、丘陵南斜面の緩傾斜地で調査を行った(図7の26調査区)。大別して2つの遺構面を検出し、古墳時代と中世の2時期の成果が得られている。

このうち下位の遺構面では、主として古墳時代後期に関する成果が得られている。とくに注目すべき遺構として、造り付けのカマドを有する古墳時代後期の竪穴建物2棟、および中央部に炉を有する竪穴建物1棟がある。当該期の畿内地方においては掘立柱建物への転換がかなり進行しており、建物を造営した集団の性格に興味がもたれる。

上位の遺構面では、中世の遺構を検出した。土地造成を目的とした盛土が確認されており、この時期に開発が進んだことがわかる。

また遺跡資料ではあるが、旧石器時代に遡るサヌカイト製剝片および8世紀頃の土器が出土していることも注目される。

### 平成27年度の調査

平成27年度には、26年度調査地の西側について発掘調査を実施した(図7の27-A・B調査区)。このうち27-B調査区ではとくにその北半において擾乱が広範囲に及んでおり、遺構の状況は明確には把握できなかった。対して27-A調査区では、26調査区から続く遺構群を検出すことができた。

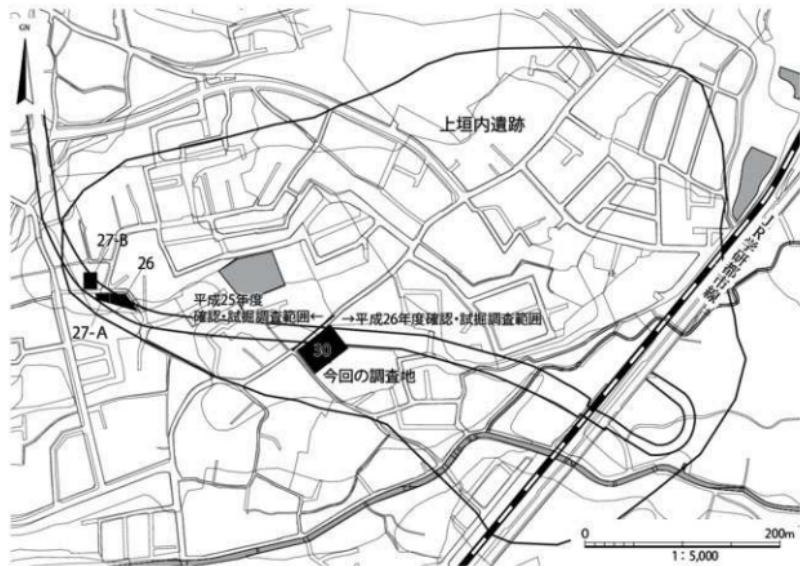


図7 既往の調査地点(調査箇所の番号は表1と対応)

注目される遺構としては、竪穴建物と思われる溝、および5×3間の側柱建物がある。側柱建物については、柱穴からは時期を明確に示す遺物が得られなかつたが、遺構面から出土した遺物により7世紀という年代観が与えられている。

そのほか、遊離資料ではあるがサヌカイト製の石鎚、平安時代の黒色土器などが出土している。

表1 上垣内遺跡における既往の調査歴

遺跡名	番号(※)	調査番号	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	調査機関	報告書
	平成25年度 確認・試掘調査	13040	2013.11.11～12.27	90	大阪府教育委員会	大阪府教委2014
上垣内遺跡	26-A	14009	2014.7.1～11.11	450	大阪府教育委員会	大阪府教委2015
	平成26年度 確認・試掘調査	15001	2015.4.1～7.10	800	大阪府教育委員会	大阪府教委2017
	27-A	18041	2019.1.7～3.31	960	大阪府教育委員会	本書
	27-B					

(※)「番号」については、図7と対応している。

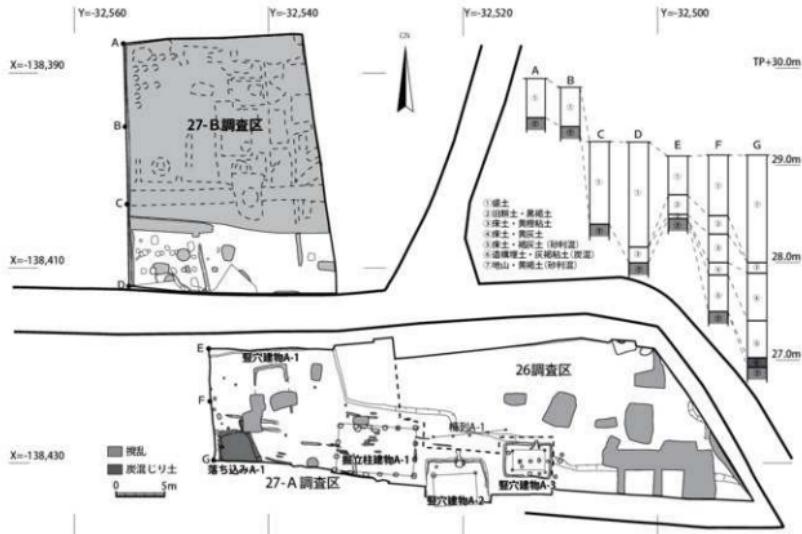


図8 既往の調査における検出遺構

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査地の層序

今回の調査地は、先に述べたように丘陵部にあり、大勢としては北西から南東に下る斜面上に位置する。今回の調査地の現地表高についてみてても、第3調査区の北東端でTP + 33.3mほど、第1調査区の南西端でTP + 29.0mほどであり、4m強の高低差が存在する。こうした高低差を極力低減し敷地を有効に活用するため、第3調査区と第2調査区の間は高さ2m弱の石垣および擁壁によって区切られている。後述するように、今回の調査では古墳時代の遺構が第2・3調査区ではまったく存在しなかったのに対し、中世以降の遺構は全調査区に残存していた。こうした遺構の検出状況からみれば、上記の土地造成は中世以降に行われた可能性が高いと考える。

今回の調査では、現代の盛土(第0層)以下、部分的に現地表下約3.0mまでの観察を行い、地層を以下の4層に大別した(図9・10、原色図版2、図版2)。

**第1層** 近・現代の作土層である。第3調査区の全面で認められた反面、第1・2調査区には分布しなかった。層厚は最大で20cmであった。

**第2層** 近世の作土層(第2a層)および盛土層(第2b層)である。第2a層は第3調査区に、第2b層は第1・2調査区に分布した。第3調査区では本層に伴う遺構として、いわゆる野窓として使用されたと考えられる漆喰貼の土坑などを検出したほか、本層の下面には耕作溝が認められた。いっぽう第1・2調査区における近世の遺構には、窓や竈のほか、便槽として使用されたと考えられる埋糞など非生産域に伴う遺構を検出している。こうした土地利用の差違は、第2a層および第2b層の分布範囲と相関している。本層からは、17世紀後半からおおむね19世紀前半までの資料が出土した。また本層からは肥前磁器をはじめとする陶磁器類や瓦類のほか、椀形溝、スラグ、羽口など金属加工に関わる遺物が出土している(原色図版6)。

**第3層** 中世の盛土を主体とし、第3調査区でのみ認められた。黄褐色を呈するシルト質砂礫を主体と

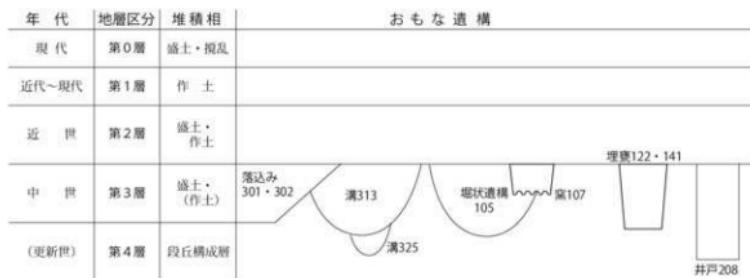


図9 地層と遺構の関係図

し、下部には第4層のブロックが認められた。層厚は最大で35cmであった。第3調査区の北端に分布した本層はとくに分級が悪くよくこなれていたため、作土である可能性があるが、確定できない。本層からは中世に属する土師器の細片などが出土したが、詳細な時期は特定できなかった。

第4層 段丘構成層である。層厚は2.0m以上ある。第1調査区では現代盛土の直下が本層となる部分が多かった。本層の上部に本来は存在していたはずの土壤化層は、今回の調査ではまったく観察できなかった。そのため、今回の調査地の全面にわたって本層が削剥されていることがわかる。今回の調査で検出した遺構の大部分が、本層の上面で検出したものである。

撹乱の壁面および部分的な深掘りによって層相を観察した。まず第2調査区と第3調査区の間に存在する石垣を部分的に撤去して行った観察では、第4層が水平に近い状態で堆積していた。近隣において明確な断層が確認されていないことを考えれば、石垣によって画された第2・3調査区間の比高は、本来の傾斜面を反映しつつ、人工的に造成されたものであることが推測できる。

また本層の上部は灰オリーブ色～にぶい黄色を呈して比較的明色で、かつ粘土質シルトを主体とする比較的細粒な堆積物で構成されていた。しかし下部ほど粗粒になる傾向があった。第1調査区においては、TP + 29.0～29.5mほどで層厚3cmほどの特徴的な粘土層が分布していた。TP + 28.8m以下には暗色帶が分布しており、植物遺体が多く含まれていた(図版2)。

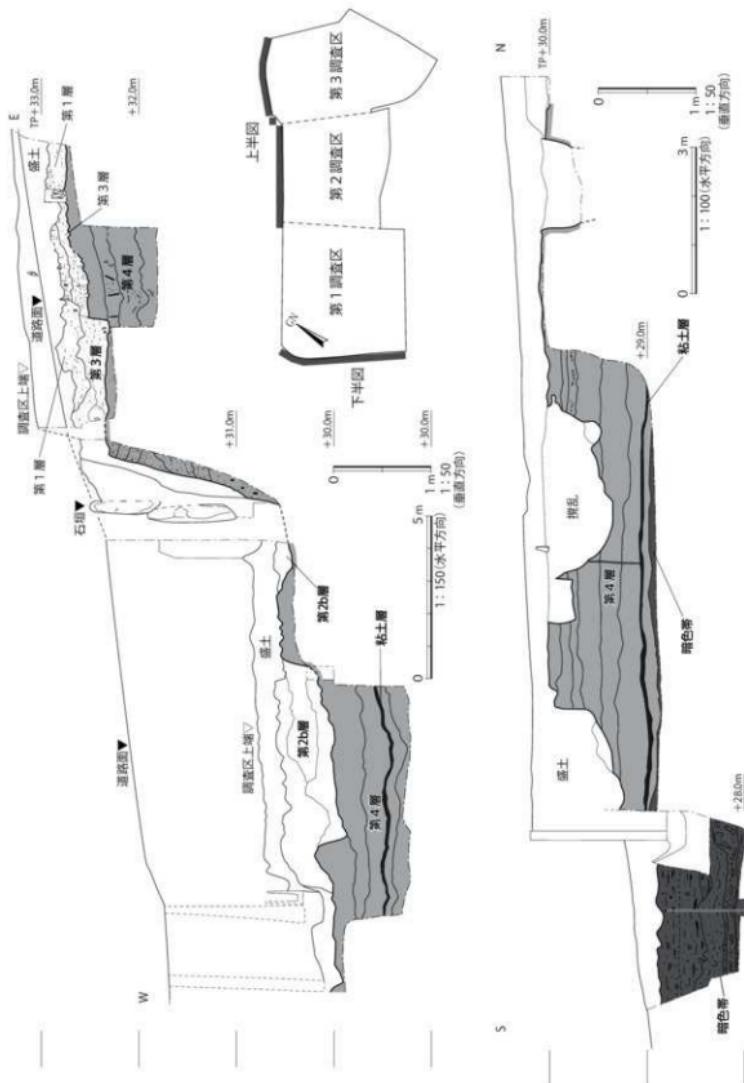


図10 調査区地層断面

## 第2節 各調査区の遺構と遺物

### 第1項 古墳時代の遺構と遺物

調査地全体の概況として、近世遺構に削平を受けている。とりわけ第1・2調査区では削平が著しく、現代の盛土層を除去するとすぐに段丘構成層である第4層に達する箇所が多かった。

古墳時代の遺構には、溝313と325がある(図11)。両遺構とも第3調査区で検出したものであるが、前述のように第1・2調査区では擾乱が著しいことから、本来は第1・2調査区にも当該期の遺構が存在した可能性はある。

溝313 第3調査区の南半分で検出した(図11-12、原色図版3、図版8~10)。東西に延びる溝であり、長さは7.5m以上、幅は最大で0.8mほどである。検出面からの深さは0.6mであった。溝の西側は後述する落込み301によって破壊されており、東端は調査区外へと延びる。なお東端は南へと屈曲する可能性が高い。また東端では後述する溝325を破壊していた。溝の底面のレベルは、西端がTP+32.2mほど、東端がTP+32.0mほどで、東側が低くなっていた。

溝の断面形状は、北肩がなだらかに底面へと落ちるのに対し、南肩は傾斜変換点をもち2段階で落ちていた。埋土は5層に区分できた。最下位にはブロックを含み溝の南北から流入したものと思われる堆積物(図12-4・5層)がある。底面には炭および段丘構成層である第4層のブロックを含むシルト～細砂が堆積し(同図3層)、その上位には炭を含むシルト～細砂(同図2層)、炭・礫を含む細砂(同1層)が堆積する。このうち1~3層は自然堆積層であり、裂痕が顕著に認められた。また褐色～黒褐色の強い暗色を呈していた。なお溝の南側には盛土(同6層)が分布し、最大で厚さ20cm程度が残存していた。性格を追求するために同層を慎重に掘り下げたが、遺物は出土しなかった。

遺物は埋土の2層から3層にかけて多く含まれていた。溝の東側と西側の2箇所に遺物の集中箇所があり、当遺構で特徴的に出土した甕類は西半で多く出土した(図12、原色図版3、図版9)。また遺物の組成とも関連するだろうが、東側の集中箇所では細片となった土器類が多かった。なお、玉類などの微細な遺物が包含される可能性を考えて2・3層から土囊10袋分を採取し水洗したが、何も出土しなかった。

当遺構からは、土師器・須恵器・埴輪が出土した(図13-14、原色図版5、図版13~15)。図13には、今回の調査で出土した遺物のうち、須恵器1~5・8~11を掲載している。1は須恵器の杯Hである。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。形態からみてTK209型式(II型式5段階)に位置づけられよう。後述する5世紀の須恵器群と同様に埋土の下層(図12-3層)から出土していることから、溝313が比較的長い間オープンな状態にあったことがわかる。なお以下に実測図を示す甕類は、いずれも内面の当て具痕を磨り消しており初期須恵器の範疇に属するものである。しかし図示できなかった細片には当て具痕を残すものが一定量存在しており、6世紀の杯H1が混入品ではないことの傍証となるだろう。

2は須恵器壺の体部である。外面の下半にはヘラケズリを施し、肩部には描列点文を巡らせる。また、外面の上半および内面底部には自然釉が付着する。3は甕ないし壺の体部であろう。外面は縄蓆文タタキの上から沈線文を巡らせる。内面は工具痕を丁寧にナデで消している。TG232号窯に類例があるため、

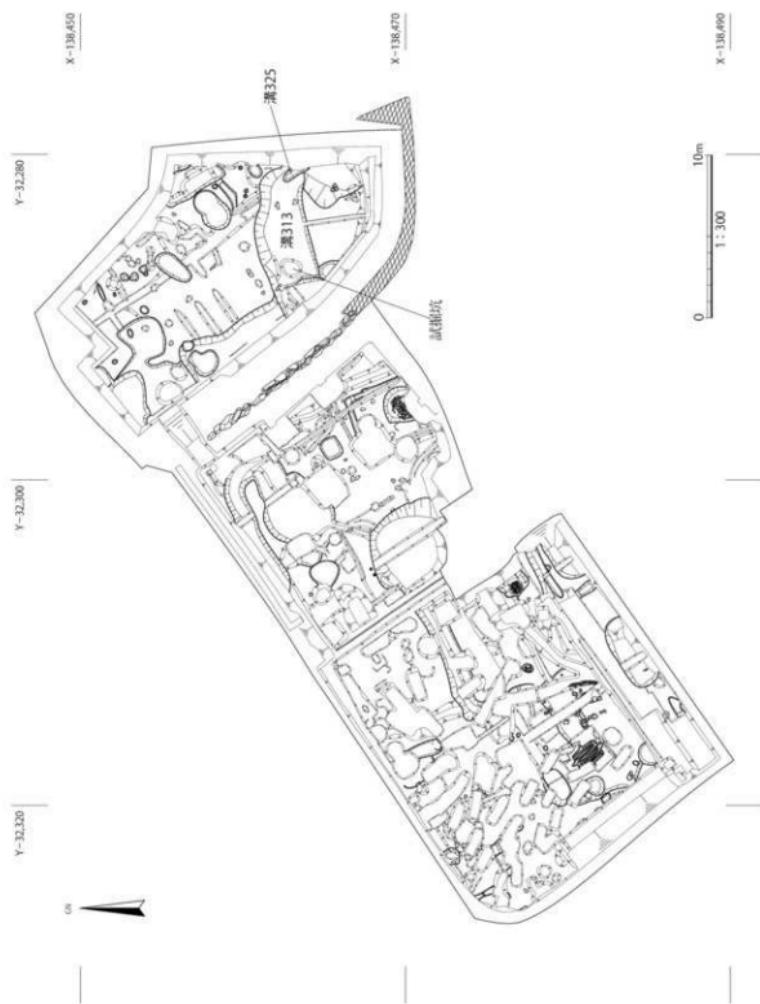
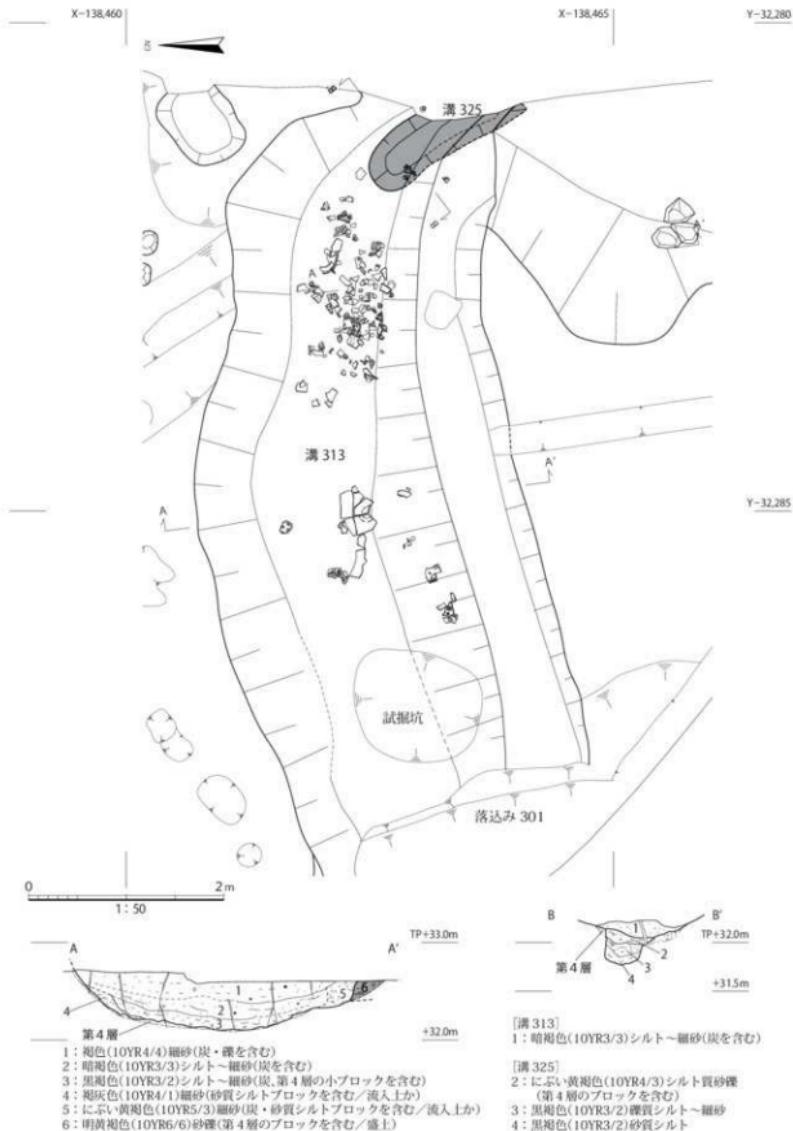


図11 古墳時代の遺構



須恵器と評価した。5は壺で、口縁端部下に巡らされた突帯はシャープな造りである。外面にはタタキメ、内面には無文當て具の痕跡が観察できる。8～10は須恵器壺の口縁部である。8は強い回転ナデによって口縁端部の下位を突帶状としている。9は大型で、断面がセピア色を呈し、口縁部の下位に巡る突帯はシャープな造りである。10も大型の壺である。口縁部と体部には接点がないが、胎土などから同一個体であると判断し、実測図では1個体として示した。口縁端部下に突帯が巡る。口縁部の外面は工具を使用した回転調整を施し、カキメ状を呈している。外面には並行タタキ痕が認められる。内面は當て具痕を丁寧にナデ消している。また、外面には自然釉が付着している。11は大壺の底部である。外面はタタキメを工具でナデ消している。下半には熔着防止のためと思われる砂が付着する。内面は同心円の當て具をナデ消しているが、前述の10ほど丁寧ではない。また内面には絞り技法によって底部を成形した痕跡が認められる(図版13)。

6は円筒埴輪で、橙色を呈し軟質に焼成されている。低い突帯を巡らせ、円形のスカシ孔が空けられている。表面の劣化が著しく調整の詳細な観察は困難であるが、外面は突帯を挟んで上位にはタテハケ、下位にはヨコハケが観察できる。内面にもわずかにハケメが認められる。7は土師器壺の口縁部である。

図13には、平成26年度に実施した確認調査の際に当遺構内に位置する試掘土坑から出土した須恵器を再掲している。12は壺で、波状文および突帯により外面を飾る。外面には並行タタキの跡を残すが、内面の當て具痕は完全にナデ消されている。図13は筒形器台の脚部である。波状文と突帯を巡らせている。14は大壺で、口縁部があまり開かない形態である。外面のタタキメ、内面の當て具ともかなり丁寧にナデ消している。

溝313から出土したこれらの遺物のうち、繩文タタキを有する3や、口縁端部の形態が古相を呈する14は、TG232型式(岡戸編1995)に遡りうる資料である。また11で可能性を指摘した底部の絞り込み技法も、ON231号窯までに認められるものである。いっぽう口縁端部からやや下がった位置に突帯が巡る5・9・10などは、TK73型式(Ⅰ型式第1段階)まで下る可能性が高いだろう。これらTG232型式に属すると考えられる資料と、TK73型式に属すると考えられる資料の間に、出土状況での上下関係はない。したがって、当遺構の掘削時期については、TG232型式～TK73型式(実年代では5世紀前半)に属する遺物がその一端を示すものと評価しておく。ただし、TK209型式(Ⅱ型式5段階)に属する杯H1が同一の層準から出土していることから、6世紀後半までの間、当遺構はオープンな状態にあったと考えられる。

当遺構の性格については、平成26年度に実施された確認調査では、古墳周溝である可能性が指摘された。今回の調査範囲ではこの見知の当否を確実に判断できる要素はない。ただし、①擁壁の造成により本来の地形が改変されているものの、溝は丘陵斜面の傾斜変換点に掘削されたものと推定されること、また②等高線に対して平行に掘削されているため排水の役割は果たしていないこと、③溝の南側に盛土(図12-6層)が認められること、④溝の南肩が2段階で落ちていること、⑤出土遺物の組成が一般的な集落のそれとは異なること、などを考え合わせると、方墳の周溝である可能性は高いものと考える。

溝325 溝313の東端部で検出し、同溝により破壊されていた(図11・12、図版10)。北西-南東に延びる溝であり、長さは1.8m以上あって調査区外へと延びる。幅は最大で0.5mほどである。検出面からの深さは0.4mであった。

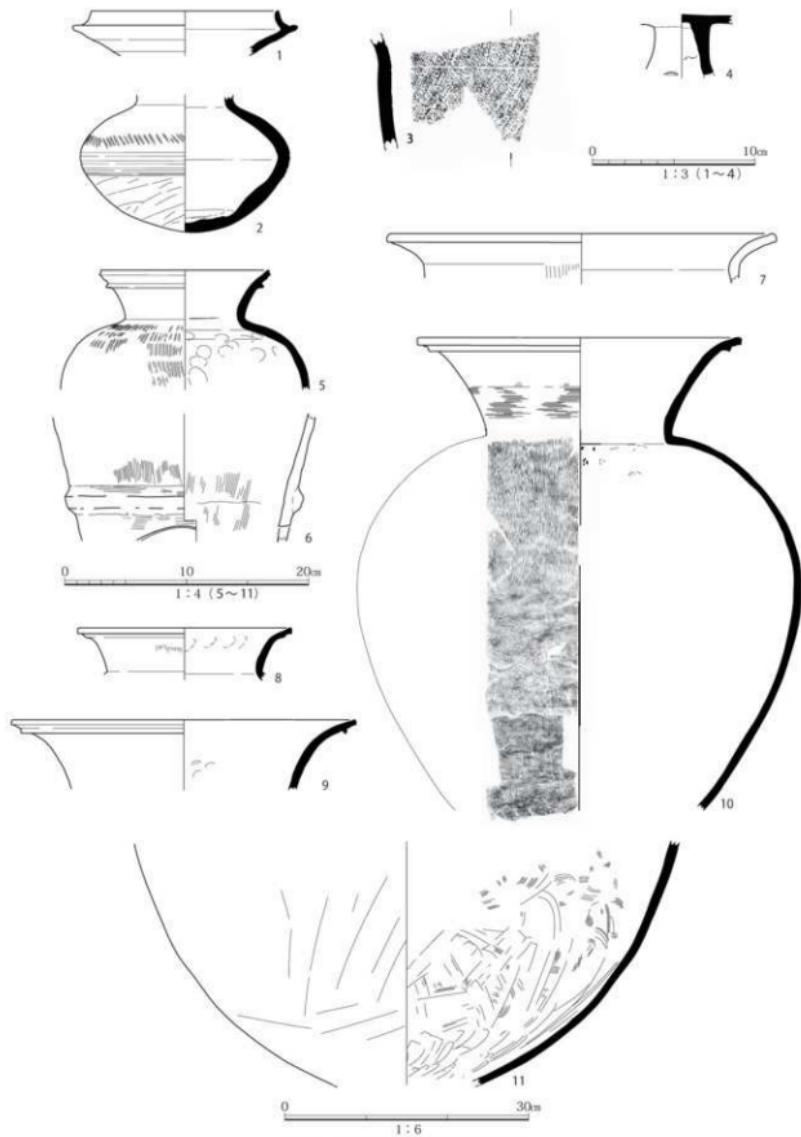
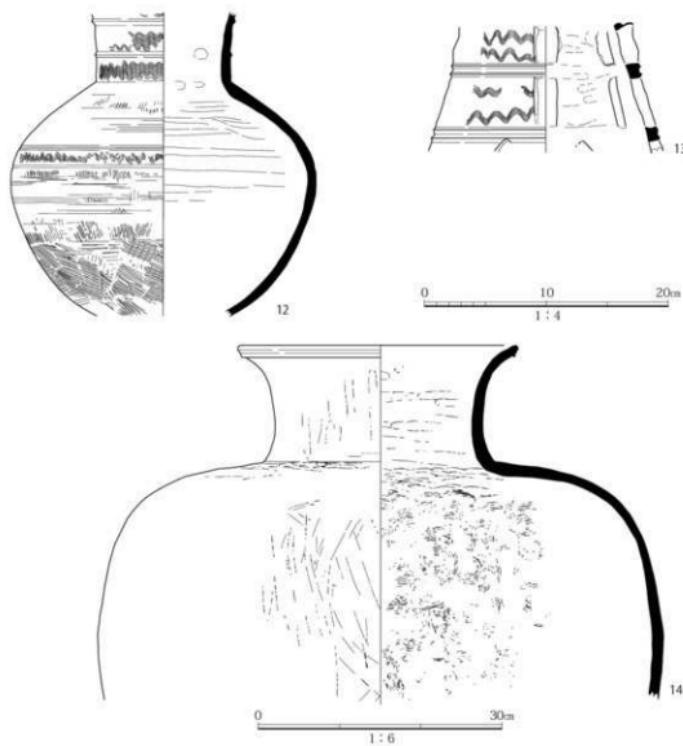


図13 溝313・325出土遺物実測図  
溝313(1~3、5~11)、溝325(4)

図14 溝313出土遺物実測図  
(確認調査出土分)

埋土は下部に自然堆積である黒褐色砂質シルト(図12-4層)および黒褐色礫質シルト～細砂(同3層)が堆積し、その上位に第4層のブロックを含むシルト質砂礫(同2層)が堆積する。このうち2層は人為的な埋め戻しに伴う堆積物だろう。溝325を埋め立ててから溝313が掘削されたと判断できるので、両溝には時期差があることがわかる。

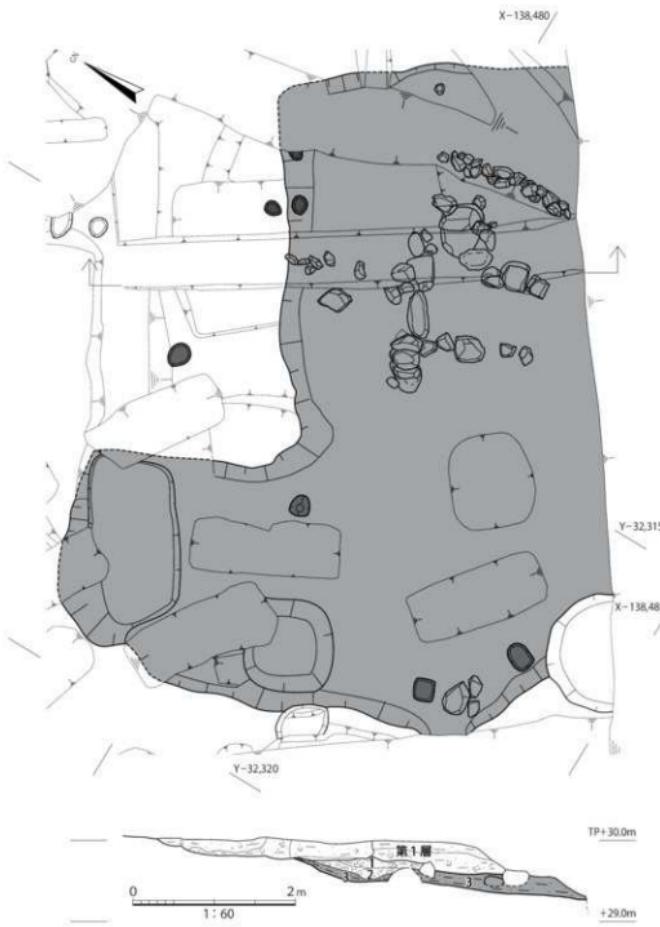
溝313からは須恵器片が出土しており、このうち高杯の脚部4を図示した(図13)。4の断面はセピア色を呈する。円形のスカシ孔が2箇所に施されている。

## 第2項 中世の遺構と遺物

中世と判断できる遺構には、第1調査区で検出した堀状遺構105、土坑117、第2調査区で検出した井戸208、第3調査区で検出した落込み301・302がある(図15)。これらのうち堀状遺構105と井戸208には被熱した礫や焼土が出土しており、また後述する遺物の年代観も近いため、同時期に存在し、



図15 中世の遺構



- 1: 灰オーリーブ色(5Y6/2)シルト質砂(第4層)のブロックを含む/埋立て層
- 2: 黄褐色(2.5YR5/6)シルト質砂(第4層のブロックを含む/埋立て層)
- 3: 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂(自然堆積層か)

図16 堀状造構105ほか遺構実測図  
網伏とした範囲が堀状造構105。濃い網伏は堀状造構に伴う可能性があるピット。

火災などを契機として同時に廃絶した可能性がある。

**堀状遺構105** 第1調査区の南部で検出した(図15・16、図版3)。近世の遺構や近現代の攪乱により著しく破壊されているが、平面形はL字形を呈する。南北6.6m以上、東西8.1mの規模があり、幅は3.9m以上、検出面からの深さは0.3mほどであった。

埋土は3層に区分でき、最下部には自然堆積層と考えられる暗灰黄色シルト質砂(図16-3層)が堆積し、その上を第4層のブロックを含む黄褐色シルト質砂(同2層)、同じく第4層のブロックを含む灰オリーブ色シルト質砂(同1層)が覆う。1・2層は人為的な埋立て層であり、投棄された大小の礫が多く含まれていた。なおこの礫には、被熱し変色したものが多く認められた。

また堀状遺構105の周囲には、直径0.3m程度、深さ0.15~0.20m程度の小ピットが多く認められた(図16)。これらの中には柱痕跡が認められるものもあった。埋土の類似性から堀状遺構に伴う可能性があるが、配置に明確な規則性はなく、機能を推測することは難しい。

堀状遺構105からは、土師器、瓦質土器、瓦が出土し、このうち土師器15、瓦質土器16、瓦17~19を図示した(図17)。このうち、15は土師器の小皿である。胎土は赤褐色を呈し、雲母が含まれる。16は擂鉢で、口縁端部の内面に面を持つ。17は鬼瓦と思われるが、比較的薄いつくりである。丸瓦18は強く焼され、表面が光沢をもつ。凹面には切り離し技法としてコビキA、および布目痕が認められる。平瓦19は成形に関わる痕跡を丁寧にナデ消している。また、各辺における面取りも丁寧である。これらの資料は、15~16世紀に位置づけられるものである。

**井戸208** 第2調査区の東南部で検出した(図15・18、原色図版4、図版7)。平面形は円形に近く直径は約2.1mであった。検出面からの深さは2.5m以上あり、安全上の配慮から完掘は行わなかった。埋土は4層に分けることができた。図18の3・4層は井戸の裏込めで、にぶい黄褐色(3層)および灰黄褐色(4層)の砂礫からなり、いずれも第4層のブロックを含んでいた。図18の1・2は井戸枠内の埋戻し土である。2層は焼土および第4層のブロックを含む黄褐色砂礫である。1層は暗灰黄色の均質な粘土質シルトからなり、自然堆積層である可能性がある。1層には被熱したものを含む礫が多く含まれていた。自然堆積層である可能性があるため、埋土を土嚢袋で5袋分採取して水洗し、0.25mmの篩を使用し植物遺体など微細遺物の捕集に努めたが、何も出土しなかった。

当遺構について、井戸枠の痕跡は確認できなかつたといっぽうで明確な裏込め土(図18-3・4層)が認識できたことから、機能的には井戸枠が存在し、廃絶時に抜き取られたことが推定できる。また埋土の下半は安全上の配慮により詳細に観察できなかつたが、断面形状がラスコ状を呈していたため、井戸枠の抜き取りにより壁面が崩落し、その後に埋め立てたことが想定できる。なお埋立て土(図18-2層)には焼土および被熱した礫が含まれることから、井戸廃絶の要因として火災が推定できる。また1層は火災により廃材となった礫を投棄したのちに粘土質シルトが自然に流入したものであろう。

井戸208からは、土師器、中世陶器、瓦質土器のほか瓦が出土した。図19にはこのうち、瀬戸美濃焼20、東播系須恵器21、瓦質土器22・24・25、常滑焼26、瓦27・28のほか产地不明の陶器23を図示している。20は内面底部に花紋を印刻する灰釉皿である。21は鉢で、口縁端部外面には自然釉が付着する。22は花文を陰刻する鉢である。被熱のためか表面の炭素はほとんど失われ、多くの部分が赤橙色を呈している。24・25は擂鉢である。2点とも外面にはハケメ調整が残るが、体部中ほどはナデ

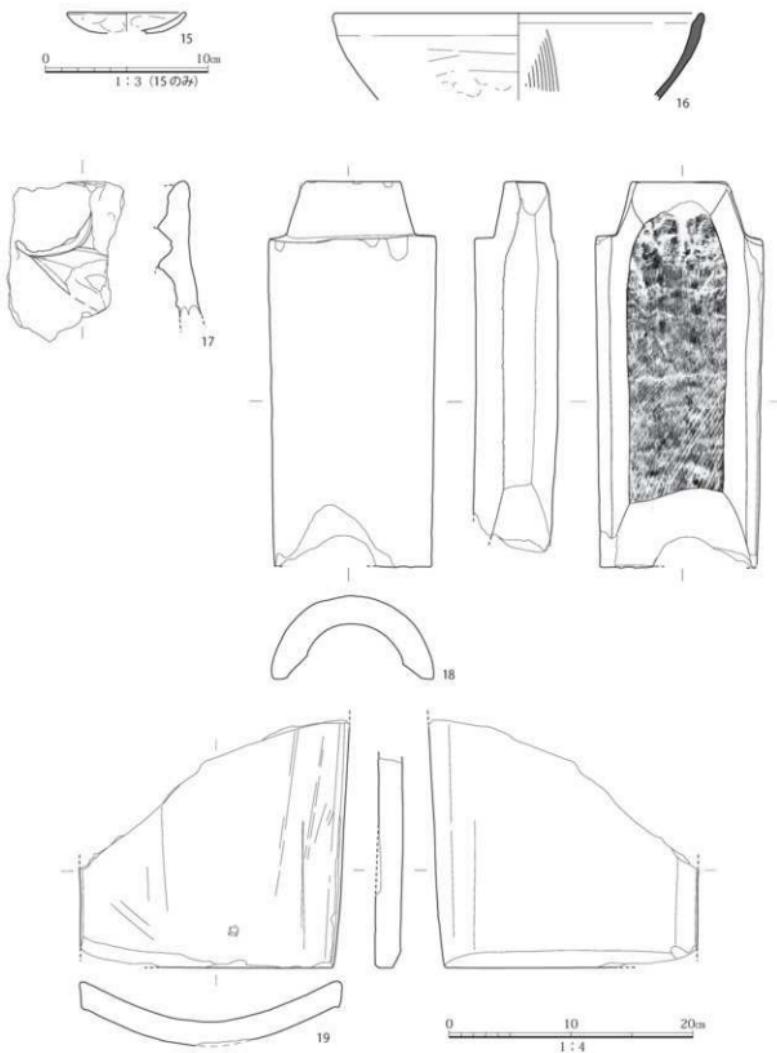


図17 堀状遺構105出土遺物実測図

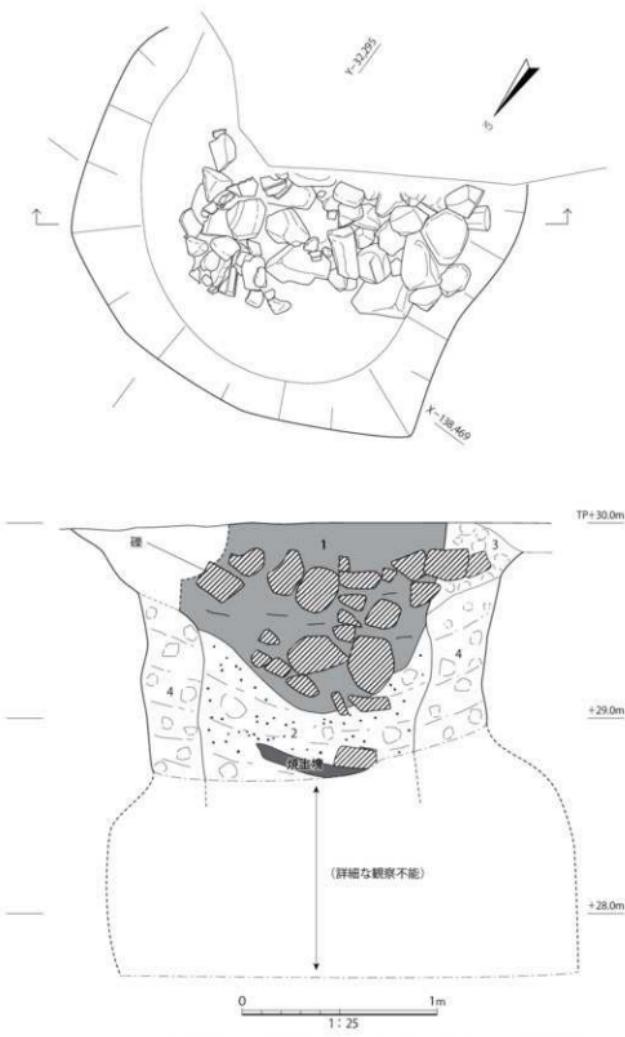


図18 井戸208遺構実測図

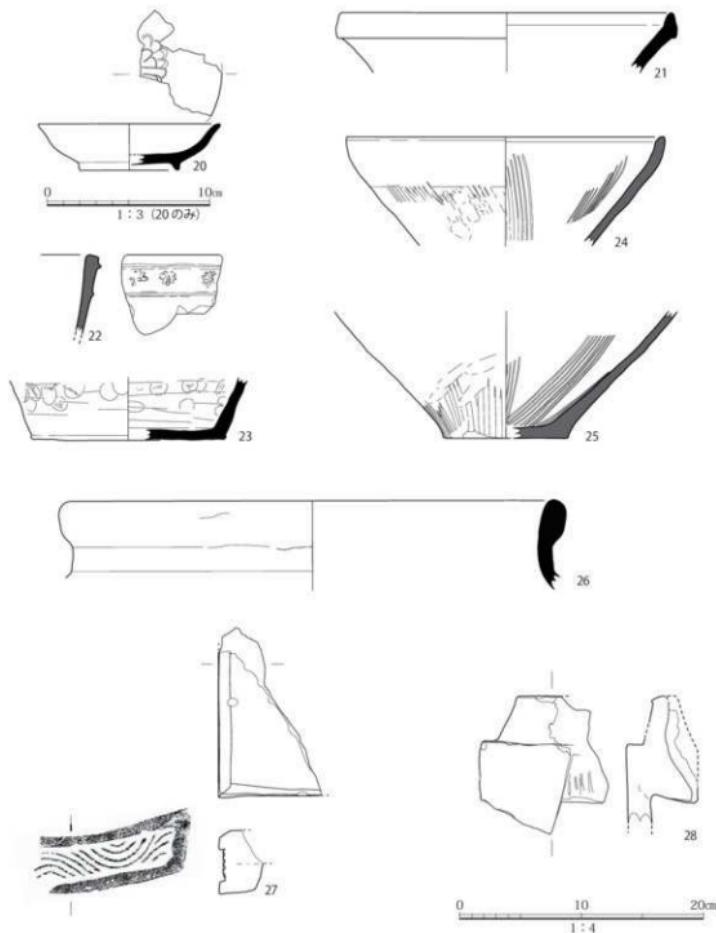


図19 井戸208出土遺物実測図

消している。内面の擗目は24が9条、25は8条を1単位とする。26は大型の甕の口縁部であり、端部が肥厚する。備前焼か。27は軒平瓦で、瓦当文様は波状文である。成形の痕跡は丁寧にナデ消され、各辺の面取りも丁寧である。28は鳥糞の丸瓦部か。丸瓦部と尾部を別作りとしており、接合部にはカキヤブリが認められる。23は壺・鉢など底部である。胎土は赤色を呈し、絞胎状を呈している。これらの資料は、15～16世紀に位置づけられる。

土坑117 第1調査区の東南部で検出した(図15・20、図版4)。平面形は長方形状を呈し、3.3m×

2.1 m以上の規模があり、遺構の東半は調査区外へと続く。検出面からの深さは1.0 mであった。埋土は2分でき、まず第4層および砂質シルトのブロック(図20-2層)で埋め立てたのち、水漬きの可能性がある褐灰色シルト質が堆積していた。このうち1層には、直径20cmほどの礫が多く含まれていた。これらの礫は何らかの目的で土坑内に持ち込まれたものと思われるが、遺構の性格は明確にできなかつた。当遺構からは中世と思われる土師器の細片が出土しているが、具体的な時期を判別できるものはなかった。

**落込み301** 第3調査区の西半で検出した。第2区と第3区の間による比高はかつての傾斜変換を一定程度は反映し、これを近世以降に明確な段差として造成したものと考えられる。落込み301は、この段差に沿うように延びる。検出長は15.0 m以上あり、検出幅は4.5 m以上ある。検出面からの深さは最大で0.5 mである。埋土は図21のA・B断面とC断面でやや異なっていた。A・B断面ではいずれもブ

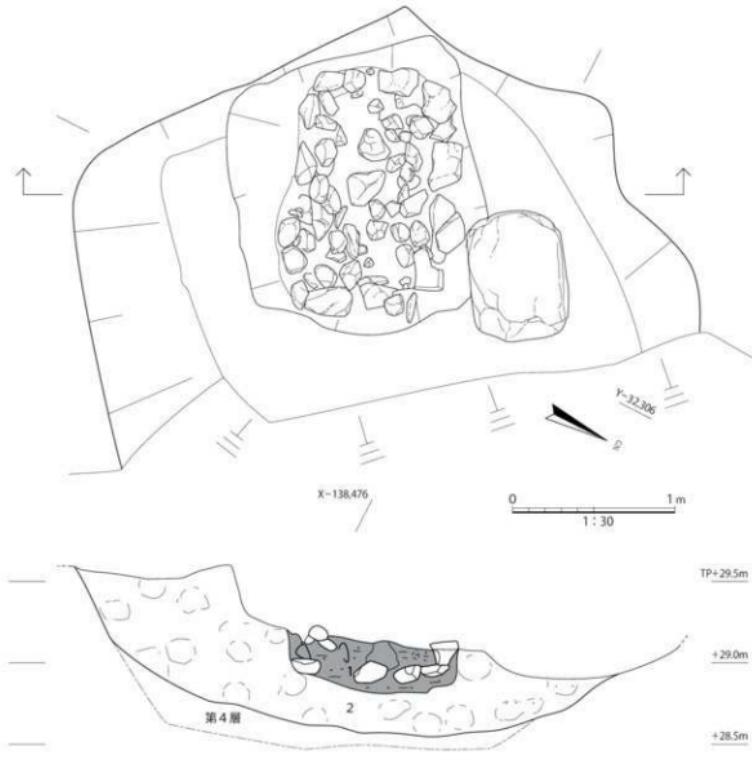


図20 土坑117遺構実測図

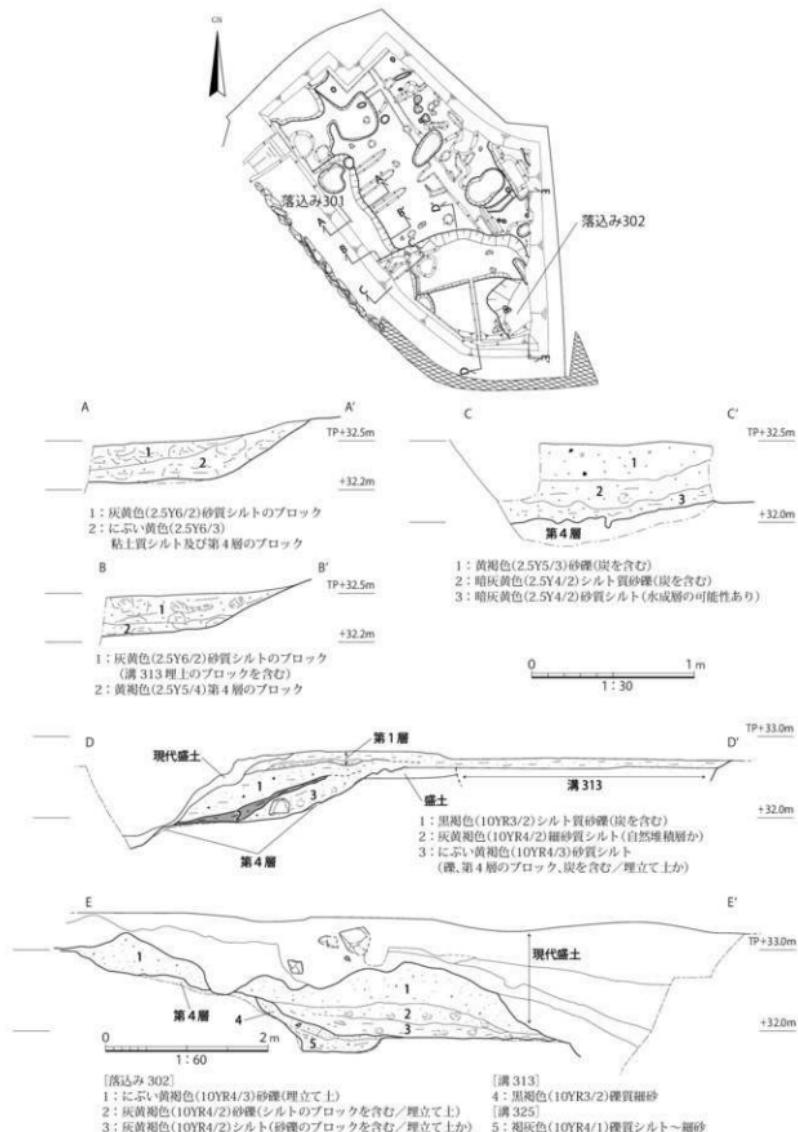


図21 落込み301・302遺構実測図

ロックを含む人為層で埋土が構成されていた。このうちB断面の埋土1層には、溝313埋土に由来すると考えられる暗色土のブロックが含まれた。対してC断面では、下部に水成層の可能性がある砂質シルト(図21-3層)が堆積し、その上位に炭を含む砂礫(同1層)およびシルト質砂礫(同2層)が堆積していた。

遺構底面の第4層には暗色帯が残されていなかったこと、また古墳時代の溝313と重複する部分ではこれを破壊していたことから、自然地形ではなく、掘削を伴う人為による遺構であることは明確である。当遺構からは中世に属すると思われる土師器片が出土したが、図示しうるものはなかった。

落込み302 第3調査区の南東隅で検出した。溝313およびその南側に分布する盛土を破壊していたので、自然地形ではなく、人為的な掘削を伴った地形である。掘削後に盛土を施していることから、何らかの土地造成が行われたものとみてよいだろう。

埋土は図21のD断面では最下位に礫・炭・第4層のブロックを含むにぶい黄褐色砂質シルト(3層)があり、その上位を自然堆積層と思われる均質な細砂質シルト(2層)が覆う。その上位は、炭を含む黒

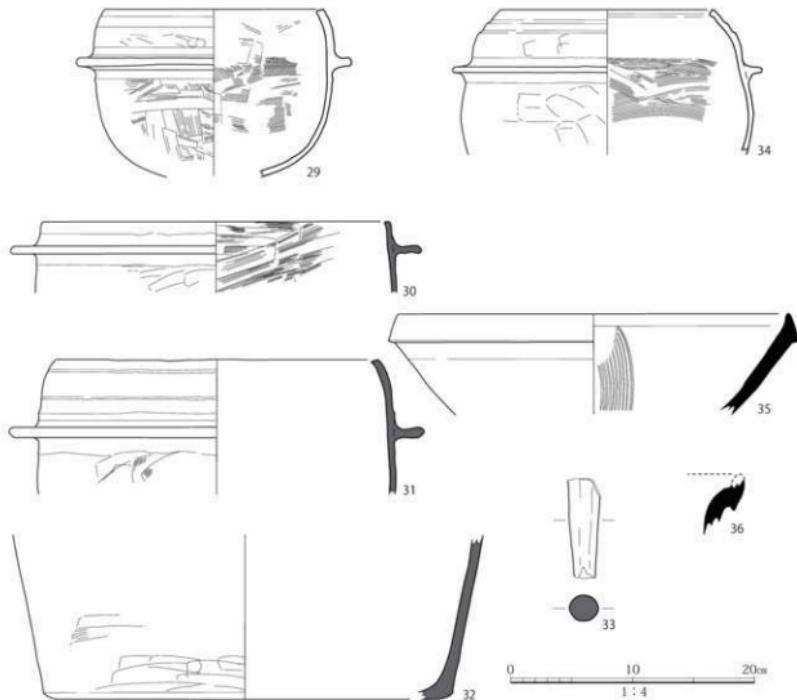


図22 落込み302出土遺物実測図

褐色のシルト質砂礫(1層)によって埋め立てられていた。ただしこの1層は、近世の地層である第1層によって削剥される。E断面ではD断面の2層に相当する地層は認められなかったが、層相からみてD断面の1層とE断面の1層、D断面の3層とE断面の2・3層が対応するものと考えられる。

当遺構からは、土師器・瓦質土器・中世陶器など比較的多くの遺物が、D断面の2・3層相当層から出土した。図22にはこのうち土師器29・34、瓦質土器30～33、中世陶器35・36を示した。土師器の羽釜29・34のうち29は、外面の鍔より下位にはススがあり、内面の底面にはオコゲ上の物質が付着する。内外面ともハケによる調整痕が認められる。34は鍔よりも上位の口縁部が長く、かつ内湾する。口縁部の外面には浅い沈線が2条巡り、内面にはハケメが認められる。明確な使用痕は認められない。30・31は瓦質土器の羽釜である。30は器壁が薄く、胎土には雲母が含まれる。外面の鍔部より下位にはススが付着し、内面にはハケメが認められる。31は炭素の吸着が甘く、あるいは土師器か。鍔よりも上位の口縁部が長く延び、かつ内湾する。32は甕などの底部である。胎土には雲母が含まれる。33は三脚釜の脚部である。

35は備前焼の擂鉢である。10条を1単位とする擂目が施されている。口縁端部は断面形が三角形を呈する。36は甕類の口縁部である。胎土に含まれる長石が溶け、器表に吹き出している。信楽焼かと思われる。

これら落込み302から出土した資料は、14世紀頃に位置づけられるものである。

### 第3項 近世の遺構と遺物

近世の遺構は竈・埋甕・土坑・溝など多くを検出した。それらの多くは18世紀後半以降のものである。遺構の種類から考えて、当地は近世において集落の一部であったことがわかる。以下では、これらのうち特徴的なものについて報告する。

竈107・土坑108 第1調査区の南半で検出した(図23・24、原色図版4、図版5)。竈107は平面形が長方形で、長辺1.6m、短辺1.2mの規模である。検出面からの深さは0.3mほどであった。竈107の西北部は攪乱によって破壊されていた。

竈は4辺の中央にそれぞれ焚口が設けられ、4方向から薪などを投入できる構造である。底面には、長辺に沿う方向で高さ

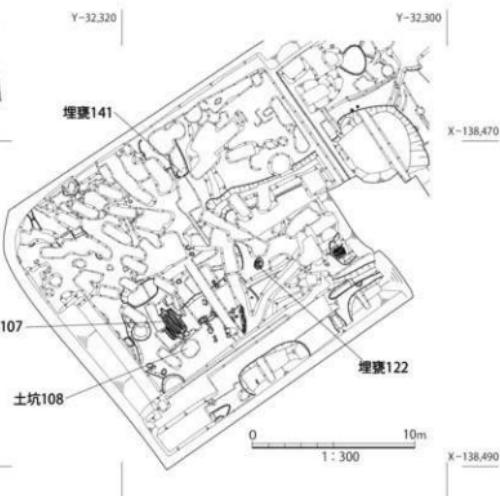
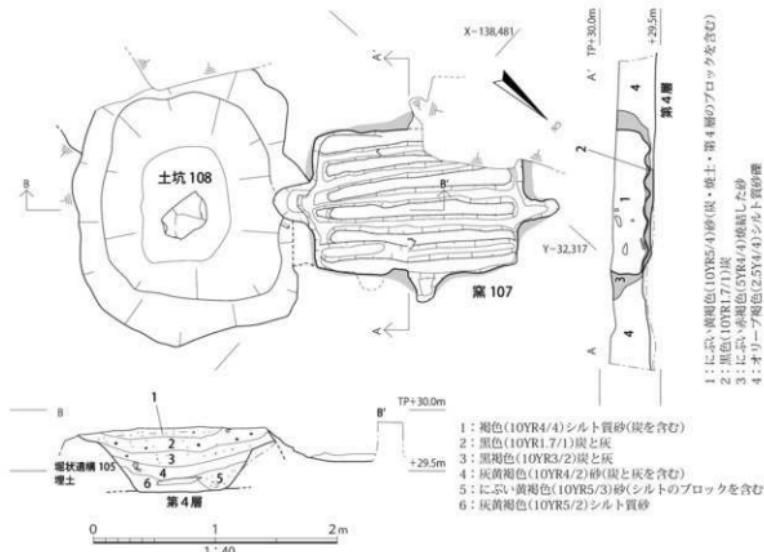


図23 近世の遺構



10cm未満の隙が4条設けられていた。上部構造は復元できないが、明確な貼土は確認できず、地下部分は第4層を掘りくぼることで構築されたことがわかる。窯の周囲は被熱により赤変していた。また、窯の埋土は炭・焼土・第4層のブロックを含むにぶい黄褐色の砂(図24-A断面1層)で、当遺構の廃絶後の埋立て層である。この1層から18世紀後葉以降の肥前焼器が出土しているので、当遺構の廃絶時期はそれ以降であることがわかる。

当遺構の性格が焼成を目的とした窯であることは、遺構の形状や、側面および底面が顕著に被熱していることから明確である。比較的形態が類似するものとして瓦窯のうちいわゆる達磨窯があるが、一般的な達磨窯に比べ当遺構は小規模であり、かつ独立した燃焼室をもたないという点で明確に異なる。そのため現時点では当窯で焼成した製品等は不明である。

土坑108は、窯105に隣接して検出した。平面形は長方形に近く、長辺2.0m以上、短辺1.8mで、検出面からの深さは0.6mほどである。埋土は炭や灰を主体としており(図24-B断面)、窯107で焼成された製品等を推測させる資料は出土しなかったが、窯107で生じた炭や灰を投棄するために掘削された灰原と考えてよいだろう。

**埋甕122 第1調査区の中央部で検出した(図23・25、図版6)。**甕の上半部は廃絶時に破壊された。埋甕には備前焼と思われる大甕(図25-37)を使用していた。37の内面には白色の付着物が認められるため、便槽として使用されたことがわかる。

**埋甕141 第1調査区の中央部で検出した(図23・26、図版6)。**甕は一部が破壊されていたが、遺

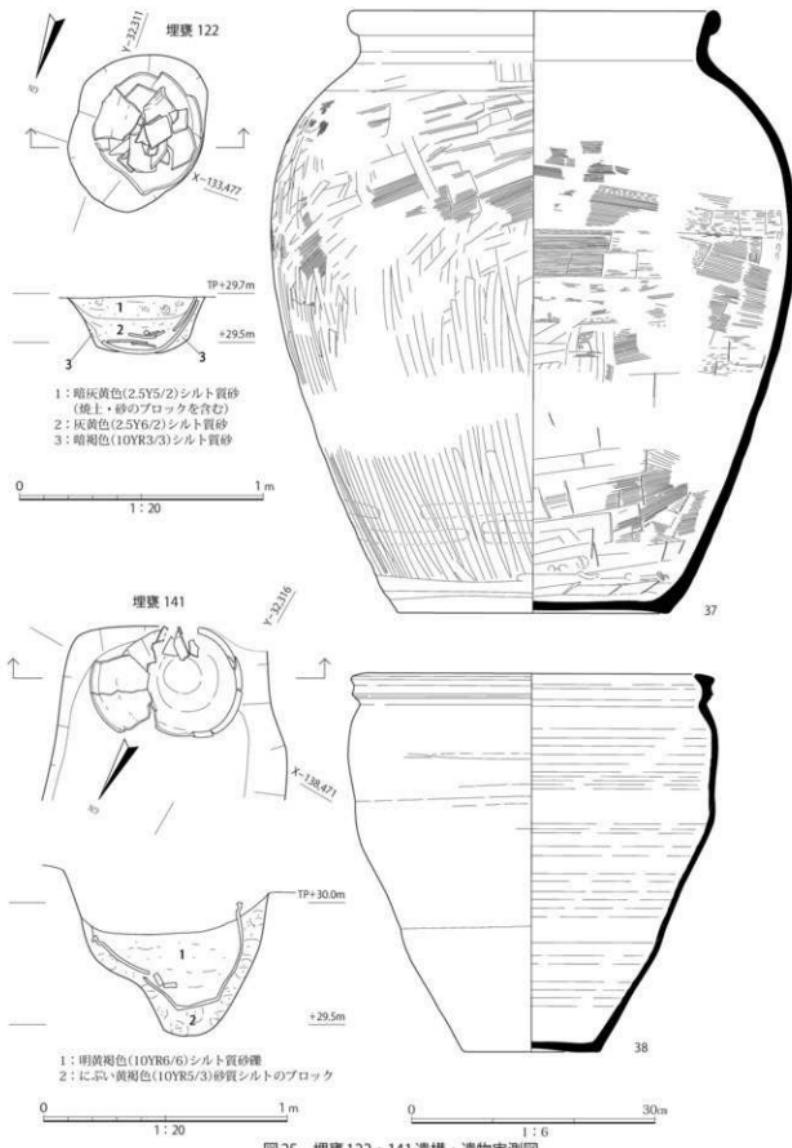


図25 埋蔵122・141遺構・遺物実測図

構の西半ではほぼ原形を保って検出した。埋甕には丹波焼と思われる甕(図26-38)を使用していた。38には明確な付着物は認められなかった。口縁部の形態的特徴からみて、17世紀後半から18世紀前半頃の資料だろう。

#### 第4項 包含層出土資料および遊離資料

近世の包含層(第1層)から出土した資料のうち、特徴的なものを図26に示した。39は窯道具であり、瓦などの焼成に際し使用されるものである。粘土の合わせ目が認められることから、型作りされていることがわかる。全体に炭素が吸着し、光沢をもつ。40は韁の羽口である。外径は6.9cm、内径は3.9cmを測る。羽口の先端にはスラグが付着している。41は瓦当文様をもたない軒平瓦で、「星瓦福」の刻印を有する。強く焼されており、19世紀前半頃の資料か。「星」は瓦屋の所在地を示すのだろう。星を含む近隣の地名では、現在の交野市に属する「星田」などがある。42は軒棟瓦である。瓦当文様の

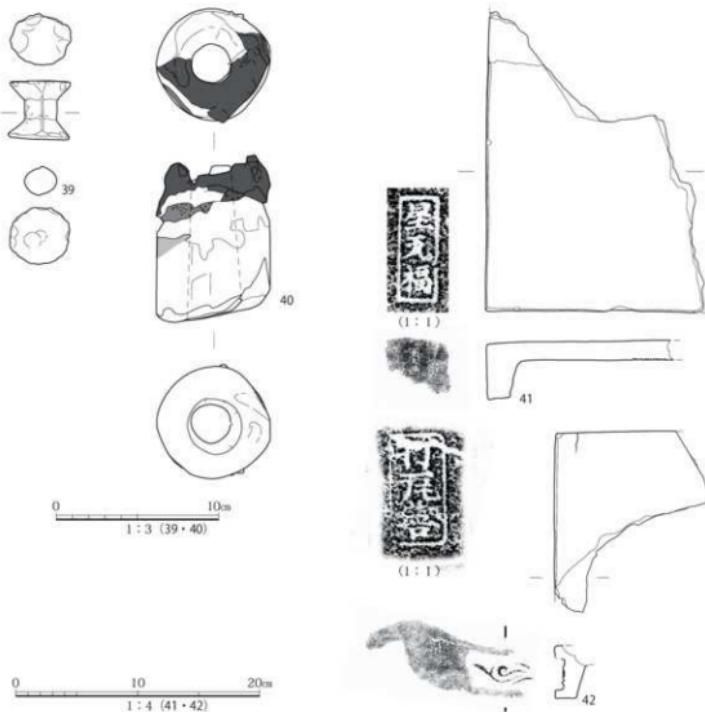


図26 近世包含層出土遺物実測図  
第1調査区(40・41)、第3調査区(39・42)

大部分を欠損するが、かろうじて唐草部が残存する。本資料も強く焼されており、19世紀前半頃の資料と考えられる。瓦当面には「打瓦善」の刻印がある。「打」を含む近隣の地名では、寝屋川市の「打上」などがある。

図27には、撲乱出土遺物および遊離資料を図示している。43は円筒埴輪である。色調は赤褐色だが、堅緻に焼成されている。突帯の断面形はM字状を呈し、円形のスカシ孔が施されている。外面の調整はタテハケである。44も円筒埴輪で、土師器質に焼成され淡褐色を呈する。表面は著しく摩耗しており、突帯の詳細な形状や調整は観察が難しい。ただ、内面・外面ともかろうじてタテハケが観察できる。また、円形のスカシ孔を有している。45は瓦質土器の小皿である。高台は低く、断面形状は三角形である。46は水返し付の軒平瓦である。水返しは一部を焼成前に切り欠いている。瓦当文様は、中心飾りが五葉文で、4転する唐草文を伴う。成形の痕跡がナデ消されるなど、全体的に丁寧な作りである。また、胎土には黒色を呈する特徴的な鉱物が多く含まれる。

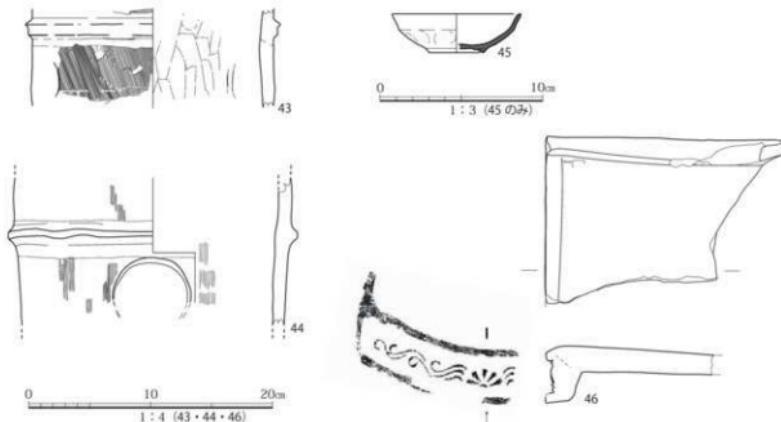


図27 撲乱出土遺物及び遊離資料実測図  
第1調査区(43・46)、第2調査区(44)、第3調査区(45)

### 第3節 確認調査の結果

**概要** 今後の事業用地については平成26年度に確認調査が実施されたところであるが、発掘調査の要否をより正確に判断するため、平成30年度には、さらに3箇所で確認調査を実施した(図28)。A・Bトレーニチおよび、讃良川を挟んで東に位置するCトレーニチはすべて上垣内遺跡に属する。調査の方法は、道路建設予定地内にトレーニチを設定し、重機および人力により掘削を行い、土層の変化、遺構・遺物の有無を確認した。以下では、各トレーニチにおける知見を報告する(図29)。

**Aトレーニチ** 丘陵裾部の平坦面に2m四方の調査区を設定し、現地表下70cmまで掘削した。最上位には現代盛土があり、その下に近・現代の耕土・床土が認められる。近・現代の耕土・床土より下位の堆積状況および遺構の検出状況は次のとおりである。

- 1層：層厚5cmほどの作土で、褐色の砂礫質シルトからなる。
  - 2層：層厚15cmほどの作土で、灰黄褐色の砂質シルトからなる。埴輪の細片が出土した。
  - 3層：層厚15cmほどの包含層で、黄褐色の砂質シルトからなる。酸化鉄の沈着が認められ、土器器の細片が出土した。本層の上面で土坑状の遺構を、下面では溝状の遺構を検出した。
  - 4層：溝状遺構の埋土であり、20cm以上の深さがある。段丘構成層(6層)のブロックを含むにぶい黄色の砂質シルトからなり、一部は水成の可能性がある。
  - 5層：土坑状遺構の埋土であり、25cm以上の深さがある。黄褐色の砂質シルトからなり、上部には酸化鉄が沈着している。
  - 6層：段丘構成層で、黄灰色のシルト～極細砂からなる。層厚は30cm以上ある。
- Bトレーニチ** 丘陵裾部の平坦面に2m四方の調査区を設定し、現地表下90cmまで掘削した。現代盛土および近・現代の耕土・床土より下位の堆積状況および遺構の検出状況は次のとおりである。

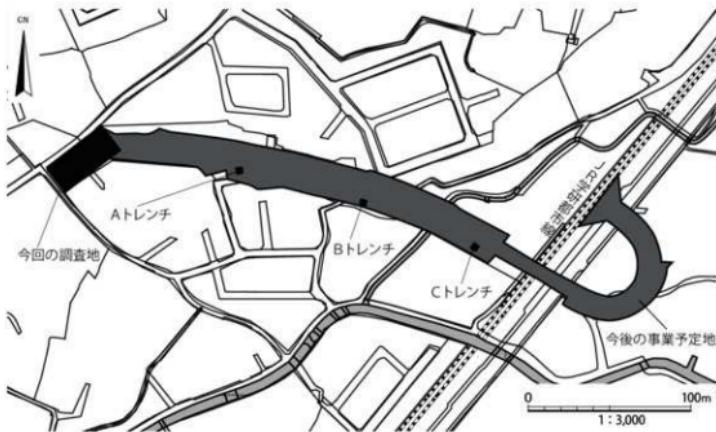


図28 確認調査の位置

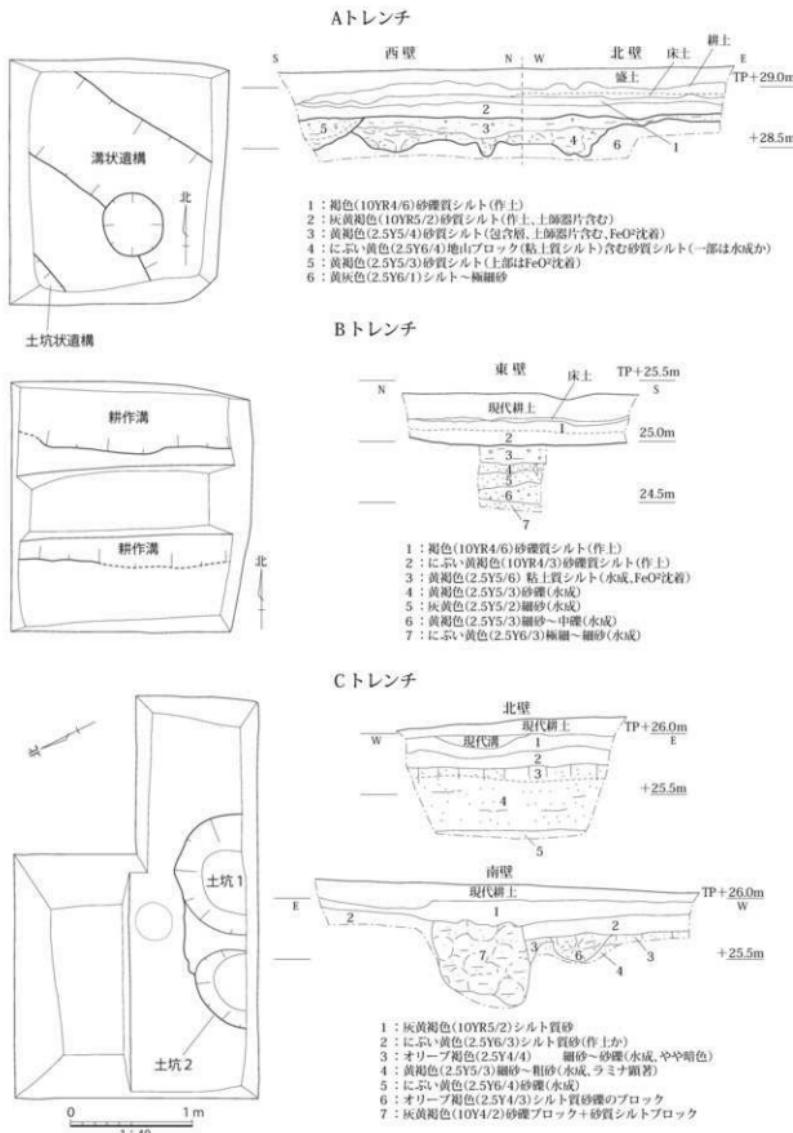


図29 確認調査各トレンチ実測図

- 1層：層厚5cm ほどの作土で、褐色の砂礫質シルトからなる。
  - 2層：層厚10cm ほどの作土で、にぶい黄褐色の砂礫質シルトからなる。本層の下面で耕作に伴う溝を検出している。土師器の細片が出土している。
  - 3層：層厚15cm ほどの水成層で、黄褐色の粘土質シルトからなる。上部には酸化鉄が沈着する。
  - 4層：層厚10cm ほどの水成層で、黄褐色の砂礫からなる。
  - 5層：層厚15cm ほどの水成層で、灰黄色の細砂からなる。
  - 6層：層厚15cm ほどの水成層で、黄褐色の細砂～中礫からなる。
  - 7層：層厚5cm 以上の水成層で、にぶい黄色の極細～細砂からなる。
- Cトレーナー 譲良川左岸の平坦面に 2m四方の調査区を設定し、現地表下95cmまで掘削した。掘削の過程で遺構が存在することが判明したため、その規模と性格を明らかにするために 1.2m × 1.0m の範囲について拡張を行った。現代盛土および近・現代の耕土・床土より下位の堆積状況および遺構の検出状況は次のとおりである。

- 1層：層厚15cm ほどで、灰黄褐色のシルト質砂よりなる。
- 2層：層厚15cm ほどの作土で、にぶい黄褐色のシルト質砂からなる。本層の上面で土坑1を検出した。また、土師器の細片が出土した。
- 3層：層厚10cm ほどの水成層である。やや土壤化しており、オリーブ褐色の細砂～砂礫からなる。本層の上面で土坑2を検出した。
- 4層：層厚40cm ほどの水成層である。黄褐色の細砂～砂礫からなり、ラミナが顕著に観察できた。
- 5層：層厚5cm 以上の水成層であり、にぶい黄色の砂礫からなる。
- 6層：土坑2の埋土であり、オリーブ褐色のシルト質砂礫ブロックからなる。土坑2は直径約65cm のほぼ円形を呈し、検出面からの深さは25cm であった。遺物は出土していない。
- 7層：土坑1の埋土であり、砂礫のブロックおよび砂質シルトのブロックからなり、灰黄褐色を呈する。土坑1は直径約1m ほぼ円形を呈し、検出面からの深さは65cm あった。土師器の細片が出土している。

まとめ Aトレーナーについては、遺構・遺物が検出された。過去に実施した近隣の確認調査においても遺構・遺物が検出されており、遺構および包含層の面的な拡がりが想定できる。そのため、道路の建設に先立ち本発掘調査が必要である。

Bトレーナーについては、耕作溝を検出したものの、遺構・遺物とも希薄であった。道路の築造計画が決定した段階で、発掘調査の実施方法について協議を行う必要がある。

Cトレーナーについても、土坑を検出し、かつ遺物が出土したもの、その時期は決定できなかった。過去の確認調査においても同様の状況であり、道路の築造計画が決定した段階で、発掘調査の実施方法について協議を行う必要がある。

## 第4章 総括

本書は上垣内遺跡における3次目の本調査の知見を報告するものであり、古墳時代、中世、近世に関する成果が得られた。以下では、過去の調査成果を参照しながら、本書で報告した内容をもとに上垣内遺跡における調査成果を時代の古い順にまとめる。

**弥生時代以前** 弥生時代以前の当遺跡の様相については、旧石器時代のサヌカイト製剝片や縄文時代に属すると思われるサヌカイト製石鏃などが出土しているものの、いずれも遊離資料であり、また当該期の遺構も検出されていないため、明確ではない。

**古墳時代** 古墳時代となても、前期に関する知見はない。上垣内遺跡において人間活動の痕跡が遺構として認められるのは、古墳時代中期になってからである。この時期の遺構として、今回の調査で検出した溝313・325がある。このうちとくに注目されるのは溝313であろう。埴輪がわずか1点しか出土していないため確定はできないが、遺構の形状からみて古墳の周溝である可能性がある。この場合、古墳は方墳であろう。またその時期は、出土した須恵器からみてTG232～TK73型式と推定される。実年代は5世紀前半に比定される。ただこの溝はその後、100年以上放置されたようである。TK209型式に属する須恵器杯Hがその廃絶年代の一端を示している。古墳時代後期については、過去の調査で竪穴建物が検出されており、上垣内遺跡が立地する丘陵において居住域としての開発が進むようである。溝313から出土した当該期の須恵器もこうした動向を反映したものである可能性があるだろう。

**古代～中世前期** 過去の調査では7世紀に属する可能性のある掘立柱建物が報告されているが、今回の調査では古代から中世前期に関する明確な知見は得られなかった。

**中世後期** これまでの調査では耕作地化に伴う造成の痕跡などを確認するに留まっていたが、今回の調査では堀状遺構、井戸など顕著な遺構を検出した。両遺構の時期は15～16世紀頃に位置づけられるものである。また両遺構からは被熱した礫や焼土が出土しており、周辺に存在した施設が16世紀に被災し焼亡したことか推測できる。そのほか、土地の造成に関わるとみられる遺構である落込み301・302を検出している。このうち302からは比較的多くの土器類が出土しており、その年代は14世紀である。

**近世** 近世については、今回の調査地では第3調査区は耕作域として、第1・2調査区は非耕作域として使用されていたようだ。このうち第1調査区では窯が検出されているが、具体的な焼成対象は未詳である。ただ、近世の包含層である第2層からは轆の羽口やスラグ、橢形滓など金属加工に関わる資料が出土していることから、窯についても何らかの手工業生産に関わる可能性があるだろう。

以上のように、今回の調査では上垣内遺跡の理解に資する知見が得られた。上垣内遺跡における調査は今後とも継続することが予定されている。当遺跡の、さらには寝屋川市域の歴史的理を深化するための知見が今後とも得られることが期待できよう。

## 引　用　文　献

- 大阪府教育委員会2014「上垣内遺跡等」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』18
- 大阪府教育委員会2015「上垣内遺跡—都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査—」『大阪府埋蔵文化財調査報告2015－4』
- 大阪府教育委員会2017「上垣内遺跡Ⅱ—都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査—」『大阪府埋蔵文化財調査報告2016－1』
- 大阪府文化財センター 2003 「大尾遺跡」『(財) 大阪府文化財センター調査報告書』第92集
- 大阪府文化財センター 2006 「太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ」『(財) 大阪府文化財センター調査報告書』第143集
- 大阪府文化財センター 2007 「寝屋南遺跡・奥山遺跡」『(財) 大阪府文化財センター調査報告書』第159集
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2004 『年代のものさし—陶邑の須恵器—』(大阪府立近つ飛鳥博物館図録)
- 岡戸哲紀(編)1995『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀1995『瓦器椀』中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 川西宏幸1978『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2・4号
- 小山正忠・竹原秀雄2002『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念』
- 織 伸一郎2007「大阪の瓦質土器—南部地域を中心として—」『第26回 中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着—瓦質土器を考える(前編)—』(発表資料集)
- 織 伸一郎2010「堺環濠都市遺跡から出土した“擂る”“鉗す”“焼き物”」『備前市歴史民俗資料館紀要』12
- 寝屋川市教育委員会1979『寝屋川市の文化財』第1集
- 寝屋川市教育委員会2009『寝屋南遺跡』『寝屋川市文化財資料』27
- 寝屋川市教育委員会2018『国史跡高宮庵寺跡発掘調査報告書』『寝屋川市文化財資料』30
- 寝屋川市史編纂委員会1998『寝屋川市史』第1巻

# 図 版





a. 調査区遠景(東から)



b. 調査区全景(上から、写真下が南東)

原色図版一  
各調査区の地層



a. 第1調査区  
第4層の堆積状況  
(南から)



b. 第2・3調査区の比高  
(南から)



c. 第3調査区北壁  
(南東から)



a. 第3調査区 溝313(北から)



b. 第3調査区 溝313(西から)



a. 第2調査区 井戸208(北から)



b. 第1調査区 窯107(東から)



a. 各調査区出土埴輪（上：44、下：6） b. 溝313出土須恵器（1）（上：12、下左：5、下右：2）



c. 溝313出土須恵器（2）（左上：14、左中：10、左下：9、右：11）



a. 金属加工関連遺物(近世) (右上から2番目: 報告書番号40)



b. 中・近世の遺物 (左上: 37、中: 18、下: 41、右上: 38、下: 46)

図版一 第一調査区全景



a. 全景(北東から)



b. 階状造構 105ほか検出状況(北から)

図版一 第一調査区の地層



a. 第4層の堆積状況



b. 第4層に含まれる植物遺体

図版二 第一調査区の遺構(一)



a. 墳状遺構 105 検出状況(北から)



b. 墳状遺構 105 断面(南西から)

図版四 第一調査区の遺構(一)



a. 土坑117検出状況(南から)



b. 土坑117断面(東から)

図版五 第一調査区の遺構(三)



a. 窑107及び土坑108(北から)



b. 窯107断面(北東から)

図版六  
第一調査区の遺構(四)



a. 埋甕 122 検出状況(北から)



b. 埋甕 141 検出状況(北から)

図版七 第一調査区の遺構



a. 第2調査区全景(東から)



b. 井戸208断面(北から)

図版八 第三調査区の全景と遺構



a. 第3調査区全景(南西から)



b. 溝313検出状況(北東から)



a. 溝313断面(東から)



b. 溝313西部  
遺物検出状況



c. 溝313東部  
遺物検出状況

図版一〇 第三調査区の遺構(一)



a. 溝325断面(南東から)

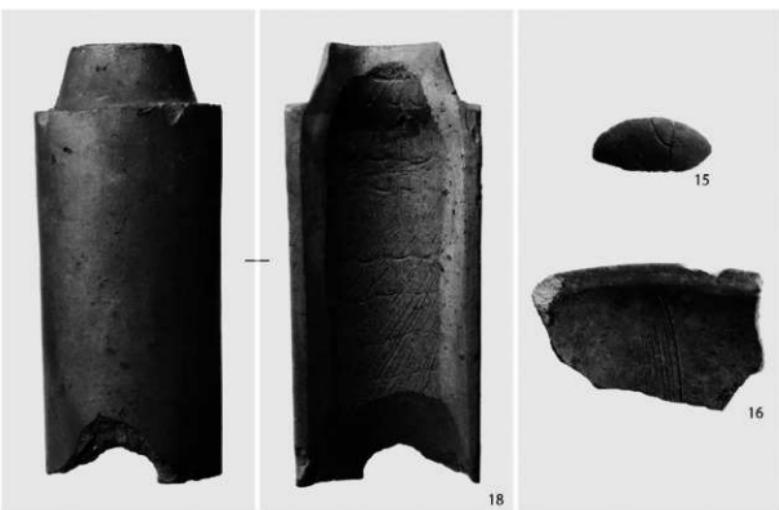


b. 落込み302の  
堆積状況(東から)



c. 落込み301の  
堆積状況(北西から)

図版一一 第一調査区出土遺物



18

15

16



19

43

46



41

圖版一二 第一調査区出土遺物



圖版一三 第三調査区出土遺物(一)



圖版一四 第三調查區出土遺物(一)

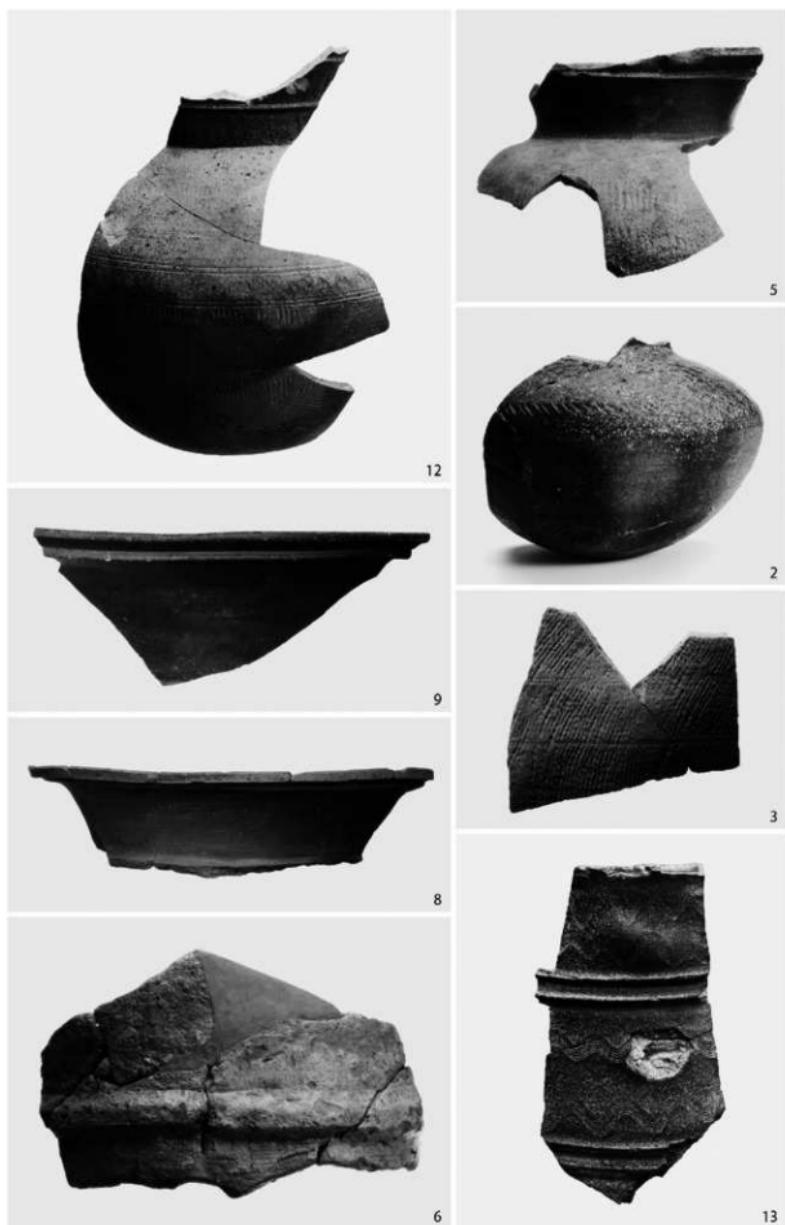


10(上半)

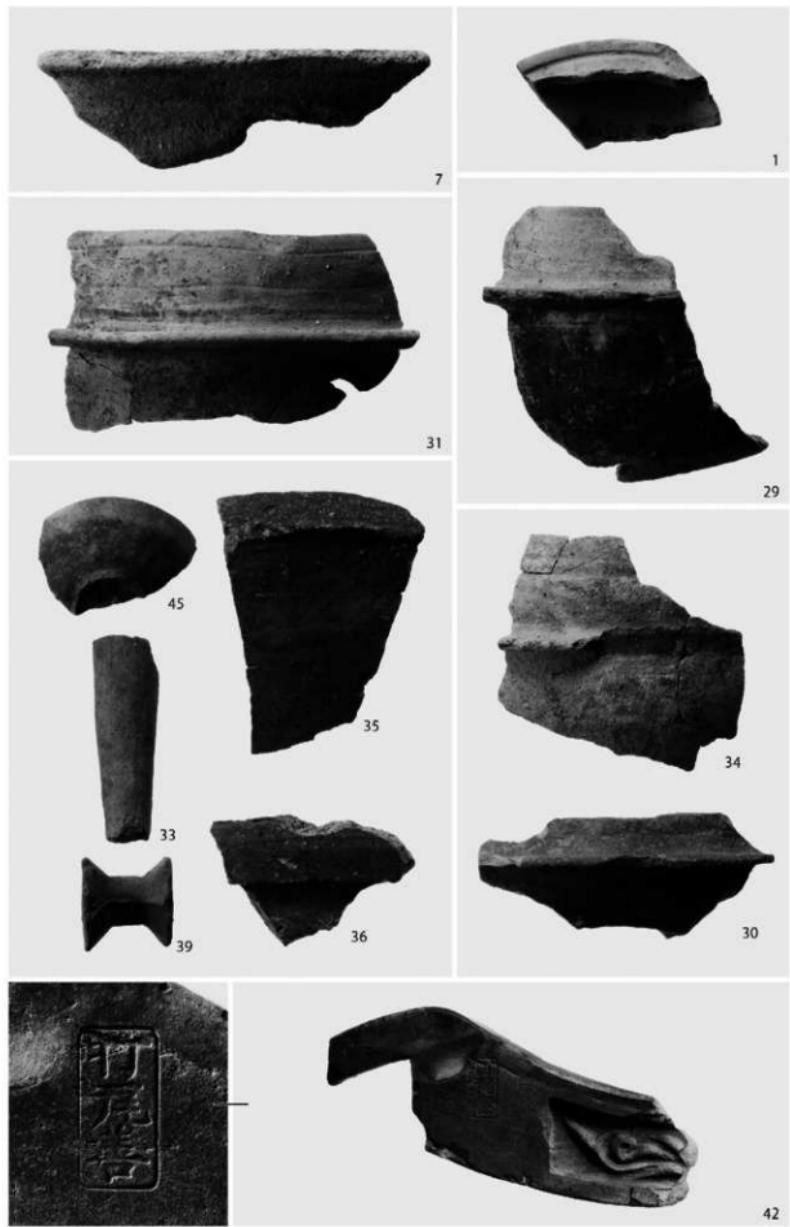


10(下半)

圖版一五 第三調査区出土遺物(三)



圖版一六 第三調查區出土遺物(四)



## 報告書抄録

大阪府埋蔵文化財調査報告2019-4

## 上垣内遺跡Ⅲ

—都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目  
TEL 06-6941-0351(代)

発行日 令和2年3月31日  
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪市東成区深江南2丁目6番8号